

朝鮮戦争の休戦会談

西尾 昭
張 君 三

目次

はじめに

第一章 ソ連の根回し

第二章 休戦会談の本格化

第三章 カークとの予備会談

第四章 ソ連から中国への指令

第五章 休戦会談中の軍事行動

第六章 休戦本会談

第七章 巨済島捕虜収容所

第八章 会談の無期延期

第九章 休戦実現までスターリン指示

第十章 ついに休戦協定建議案まとなる

第十一章 休戦直前の根回し

第十二章 中朝の捕虜交換の最終案

終わりに

参考文献

はじめに

クラウゼヴィッツは、『戦争論』のなかで戦争の領域を次のように明確に分類している。『一つは敵の完全な打倒を目的とする戦争である。なお、この場合に国家としての敵国を政治的

に抹殺するか、それとも単に無抵抗ならしめ、従つてまた我方のよくするままの講和に應ぜざるを得なくするかは問うところではない、……また第二は、敵国の国境付近において敵国土の幾許かを略取しようとする戦争である、略取した土地を永久に領有するかそれとも講和に際し有利な取引条件とするかは^(一)別問題として、と区分した。

これを朝鮮戦争に当て嵌めると、前者の場合、勃発から仁川上陸までの状況と設定することができ、後者の場合は、中共軍の介入後三八度線を挟んで南北間で鎬を削り合った時期に相当するが、本稿では後者を中心にスターリンを軸にして毛沢東と金日成が如何に工作を練り、休戦まで持ち込んだかを論究してみることしたい。

思うに、朝鮮の休戦会談では、膠着状態での中米間の『領土の分捕り合い』の域を脱せず結果的に見れば、勝敗のない戦争をいかに終らせるか、ということであつたが、とりわけ中朝側による休戦会談は、スターリンが考案し、毛沢東は実践への構図を描き、金日成が二者の恣意のままに実践していくという手筈を整えた。

中共軍の参入が戦争を膠着させ、主客転倒の形式で朝鮮人同士が戦争が米中対決に形に変えることとなつた。他方米国は、

韓国を説得して和平へと急ぐことになり、ソ連は中国に対して休戦に向け北朝鮮を説得するように促した。

はつきり言えることは、米中両国ともこの段階で朝鮮半島に介入して得することはないと考え、和平工作を始め、その後自方有利に状況を進展させようとしたことだ。筆者は、アメリカの朝鮮戦争への参入までの過程について数度仮説を立てて論究したことがある。

アメリカの言う自由や正義も、実を言えば、世界の憲兵として役割を果たすための表向きの理由づけであり、朝鮮半島問題に介入して見たところで得するは何もなかった。アメリカが韓国を支援したのは当時李承晩政権がアメリカを支持し、アメリカも東北アジアにおける『反共の砦』として韓国の地政学的価値を重要視したに過ぎず、その意味では韓国が『何が何でも反共』国家であつたからこそアメリカにとつて駐留する価値は十分にあつた。がこれも中共の朝鮮半島への介入前の話で、その後の状況は変わっていく。

まず、朝鮮半島における中共軍の存在は、アメリカにとつて脅威であつた。次に、戦争の長期化によつてアメリカ政府や軍部で考えていた短期決戦という計算にも狂いが生じた。三つ目に、多寡が韓国のために可愛い子供を朝鮮戦争で死なせること

はない、という世論が共和党政権誕生を控えたアメリカ国内に澎湃した。四つ目に、朝鮮戦争に兵力を集中させたためにNATO体制が手薄となり、ソ連によって虚を突かれる虞れが多分にあった、などである。

また、中国にもつぎのような事情があった。

一九四九年十月に、中国は国府勢力を中国本土から追い払い、共産党中心の国土統一が完成したものの、貧国に成り下がってしまった。中国人民は、限界ギリギリまでの耐乏生活を強いられていて、中国政府も人民を食わせることも困難な状況の中で友邦・朝鮮を助けることになる。それに加えアメリカの庇護の下に台湾がいつ本土決戦に出るか予測のできない軍事的状況にあった。同盟国ソ連もそんなに頼りにならない。それに、ソ連は中国に朝鮮の面倒を見させておきながら戦場で使用する武器や軍需物資、その他必要機材の一切を実費で賄わせている。そのため中国は経済的に逼迫していた。つまり中国は戦争をつづける状況になかった。

五〇年一月二七日に国連ではインド代表パニシカによって和平に関する提案があった。「戦争の速やかな終息と公平な解釈」に関する提案がそれである。それによれば、「三八度線で

戦争中止、朝鮮戦争関連国間で国際会議を開き和平交渉に入る、中国はA・A諸国の提案を受け入れ三八度線を越える軍事行動は行わない……」という内容、中国はその受け入れを拒否した。

中国政府の外交部長・周恩来は、

「A・A諸国は、アメリカの朝鮮侵略に際して何も触れなかった。アメリカの走狗・フリッピンを中立国の中に入れる理由は奈辺にあるか」とパニカに詰め寄った。それに、中国の朝鮮戦争への参入は正当行為であり、北朝鮮が五〇年六月二五日に戦争行為に出たのにも、国連が朝鮮問題に対して何ら具体的解決案を出さなかったからだ、と強弁した。これは、全く自己撞着の論理である。一応、表向きでは戦争を続行する気配を見せた。毛沢東も長期戦を覚悟し、来るべき不利な状況に備え兵士に

「休戦に備え、どんなことがあっても三八度線付近を占領すること、国連軍は中共軍との対決は必至と見なしている。如何なることがあっても全面撤退などせずに輸送機、冬將軍の到来、兵士の疲弊などの悪条件が重なっても今までのような山岳移動は行わず要塞攻撃に作戦を切り替えよ。」と訓示した。

ところが、ソ連は中国の意思を無視し、アメリカと歩調を合

わけて休戦会談を大急ぎ休戦に持ち込むべき理由があった。五〇年一〇月ころからスターリンの身边に異変が起き、持病の心臓病が悪化、人事不省に陥ることしばしばあった。そのことが国際社会に知れるとソ連の立場がまずくなるし、スターリンがそのような精神状態にあつては戦局判断に際しても支障を来し兼ねないことになる。それについて、モロトフがうっかりこんなことを漏すこともあつた。⁽¹⁾⁽²⁾

以上のような事情でヴィシンスキーとグロムイコなどが個人的なパイプを通じてアメリカ國務省関係者と水面下で対米交渉をやつた。

「(ソビエト代表团) 二八一—二三

特別番号 六二、六三 (極秘)

グロムイコ同志

九月二六日マリクの許可を得て、チャラブキン同志の知己ランカスターに会いました。この会見はランカスターがチャラブキン宛に出した書簡を通じて行つた要請に因るものがあります。

ランカスターは『グロムイコ氏を良く知っている、この交渉は自己の責任で行っている、ソ連側で、もし、アメリカ國

務省の代表との会見を希望しているならば、ロングアイランドの自宅で会見の用意を整うつもりでいる』、と言いました。

同時にランカスターは『國務省代表とは、アチソン長官の補佐官の中で誰かに、又はアメリカ大使の中で誰かとの關係を意味している』と言いましたが、具体的に誰と姓名は挙げなかつたのです。チャラブキンが『本会見の目的はなにか』と問うと、ランカスターは『朝鮮に関する問題の検討』と答え、本會議には甚大な意義が付与されていて、會談次第では平和をもたらしうる』と付言しました。ランカスターの話によればこの案件に反して如何なる覺書も提出しないで會談が行われるとすれば、予備的でかつ研究的な性格を帯びる内容のものであるべきだ、會談内容も記録しないことが前提となる』、と強調しました。

ランカスターは同會談の成否について、我が方の速やかな回答をほしいと要請し、また会見が行われない場合この話はなかつたことにしてくれ、と付言しました。

チャラブキンの話では、同志とランカスターは既に熟知の間柄とのことなので、以上に述べた事項などが沈着でかつ一考に値するもの、という同志の判断が立てば直ぐに報告する

か、又同志の意見を小職にお聞かせください。

我々が対応すべき諸問題を検討し、建議できるように配慮して下さい。

五〇年九月二七日

ヴィシンスキー⁽²⁾

これに対してグロムイコはヴィシンスキーに対して、次のように回答している。

「六二のランカスター提案のように、アチソンの補佐官又はアメリカの大使の一人に会うことにマリクは同意しているというランカスターへの通知を、チャラプキンに出して上げて下さい。マリクは国務省代表の意見を聴き、アメリカが朝鮮問題を平和的に調整する方向に進んでいる様子が同志の目に付いたら、対話において提起されるような諸問題についてマリク自身が熟考し『次回会うとき、その回答を米側に出す』と表明しなければなりません。

結果は電文でご通知下さい。

上部機関の委任により

五〇年九月二八日

グロムイコ⁽³⁾

このような背景のなかからマリクの国連演説が生まれ、その後中朝両国の意思に関係なく休戦の話し合いが始められ、ソ連は中国に或いは朝鮮に会談に際し、その方針を伝えることになる。

米ソ両国が休戦会談を思いつき、実行に移すまで紆余曲折を経て三年の時間を経て目的にこぎつくことになるのであるが、現在もそうであるように、共産主義国家の外交は、一筋縄では解決することができない。まず、虚仮威しから始まる。次ぎには無理難題を押し付け相手を困らす。初志貫徹を貫くかのように見えて、その実、かなりもろい面を露出する。しかし、相手にはタイムリな状況を拵えて、一見、寸鉄を食らわせるかのように見えるも、その行動には確信がない。背後に強力な支援者がいなければ、微動もできない面を露呈した。

しかし、このような、北朝鮮の弱点を見抜くに米韓側では二年半の歳月を要した。

今の北朝鮮同様に、当時の北朝鮮代表による理不尽な要求に遭い、会談は頓挫した。それを見事に解決したのは、一九五三年五月一二日の国連軍司令官、リッジウエーとクラークの交代によってであった。

クラーク將軍は、オーストリア占領軍司令部の勤務時代にス

ターリンを相手に対ソ外交の場において真価を発揮した。かれは共産主義国家特有の外交の手を知り尽くしており、ウソの上塗り、恐喝、虚偽威し、泣き落とし、強圧的態度に屈することなく、正面切って堂々と自方案件を示しそれに対して納得が行かなければ退席するという戦法を取った。これが図に当たり、ソ連政府との交渉では常に優位に立つことができたが、スターリンにとって遣り難い相手であった。クラーク將軍は休戦会談を成功に導いた。本稿は、それまでの一連の過程に関する論究である。

第一章 ソ連の根回し

五〇年一二月ソ連の休戦への動きは、活発になった。

「ニューヨーク ヴィシンスキー同志

朝鮮停戦に関する同志の提議は、現況に鑑み、不当に思えます。目下米軍は敗北を喫しており、アメリカが日毎に停戦を提案して来ております。これが不利に展開されている戦況を挽回するための時間稼ぎであり、完全な敗北からなんとか逃れようともがいています。ソビエト代表団の草案に、次の

朝鮮戦争の休戦会談

諸点を含めるべきでしょう。

- (1)、朝鮮から外国軍隊の完全撤退
 - (2)、朝鮮のことは朝鮮人民の自主性に任せること
- 他の同志の意見には異議なし。
- A グロムイコ⁽⁴⁾

これはスターリンの裁定をもらってグロムイコがヴィシンスキーに出した電文である。その証拠は同日スターリンが駐北京ソ連大使・ロシチンに、周恩来に手渡すべき電文を、次のように送っていることのなかからそのことが窺える。

『ソ連は同志の朝鮮停戦案に同意します。

同志が出した条件を満たさずに軍事行動を停止することは、不可能だと考えます。

我々は折角手持ちのカードをアメリカの手先の、イギリス、スエーデン、インド（これら三国は以前に朝鮮停戦に関して『朝鮮三人委員会』を結成し、アメリカの意見を代弁しているかのような印象を与えることがあった―注、筆者）に対して易々とお見せすることはできません。ソウルを占領しない限り中国は自己のカードを相手に見せてはいけません。アメリカが国連決定を覆し、中国が提案した五条件――外国

軍隊の引き上げ、朝鮮人民の自主的平和解決、アメリカの台湾及び朝鮮からの引き上げなど……(筆者)を米韓側が逆に利用しないとも限りませんからね。

従って我が方としては以下の諸点に局限してなすべきだと考えます。

- (1)、中国政府はイギリス、スエーデン、インド代表と共に朝鮮での軍事行動を早期に終結したいので、その方向で努力すべきでしょう。
- (2)、アメリカは休戦条件として何を考えているのか、我々が知る限り三国は戦線について中国と話し合う権限を国連又はアメリカのいずれの国からも与えられていないと、余は承知しております。さらにはイギリス代表団は中国を批判して、朝鮮問題の調整にブレーキをかける内容の決議文をアメリカ、フランス、ノルエー、エクアドル、キューバーなどの代表らと共同で国連第一委員会に提出しました。

- (3)、我々は朝鮮停戦の条件に関する国連とアメリカの意見が知りたいのです。

フィリポープ

進展状況は、電報で知らせること 五一年二月七日

次の暗号文書によれば、駐北京ソ連大使・ロシチンは同日中共外相の周恩来に会っていることが判明する。

「北京時間二月七日三時、周恩来は小職を招待し、中国政府の名の下に以下のことを伝えてきました。『最近レイサックスでインド、イギリス、スエーデン代表らと、国連事務総長・トリグブ・リが中国の国連代表の伍修権に対して、どんな条件ならば停戦の話し合いの応じるのか、と質問してきたそうです。彼らは朝鮮自体を三八度線で維持する考えです。

中国政府は不利な立場におかれることを望んではいず、主導権を掌握し、かつ、この問題に関して積極性を示しながらも伍修権に対してはイギリス、インド、スエーデンなどの代表にトリグブ・リに対する回答を、次のようにしたい考えです。

『朝鮮での軍事行動の停止には、次の条件が必要である。

- (1)、朝鮮から外国軍隊を完全に撤退すること
- (2)、台湾海峡と台湾領域から、アメリカ軍が撤退すること

と

- (3)、朝鮮問題は朝鮮人の自主性に任せること
(4)、中国の代表の国連参加と蒋介石代表を国連から排除すること

(5)、対日平和条約の準備のため、四カ国外相会議の招集以上の五項目が受諾されれば、五大国は休戦条件に署名し、会議招集のために自己代表を派遣することができるとする。』

周恩来に上記の条件を、書面で伝達しました。

周恩来は伍修権を派遣する前に、朝鮮停戦に関するこれらの条件について、ソ連政府と相談したい、また本件について、ソ連政府からは意見を開陳して欲しいと、希望しております。中国政府はソ連政府に対して、本日に回答が欲しいと伝えて欲しい、と周恩来は言っております。

小職は彼が伝えた電報や朝鮮の停戦に関する回答要請を、朝鮮とソ連政府に即刻に伝えるよう、周恩来に言明しておきました

五〇年一月二七日（ロシア時間）

ロシチン⁽⁶⁾

これで朝鮮戦争の主と客が完全に転倒した。

この段階で北朝鮮による社会主義民主主義的な表現の、『国

朝鮮戦争の休戦会談

家及び民族の自主権』云々と言われてもいかにも空々しく聞こえ、南の李承晩も、北の金日成も、蚊帳の外に置かれていた。

第二章 休戦会談の本格化

五一年一月一三日駐北京ソ連大使・ロシチンの書簡では、『ソ・中・朝』三国間で休戦会談が本格的に進められそうな気配が見えた。この時期に韓国は屈辱的とも思える首都ソウルが同年一月四日に陥落させられ、これで二度も共産軍に落ちることとなった。

一月一三日現在の米韓軍は、人海戦術を駆使して怒濤のように押し寄せてくる中共軍の勢いを止めることはできず、退却に続く退却、ついに防御ラインが突破され三七度まで下げていた。

このときのロシチンの、スターリンへの報告書の中では氣勢上々たる様子がうかがえ、また、休戦の話も然ることながら、中・ソ・朝三国の軍事防衛ライン乃至攻撃目標の設定などを協議するため毛沢東は、彭徳懷と金日成を呼んでいる。

「スターリン同志へ

同志社法学 五四巻六号

二二七（二二六二）

同志がお送りになったNo四八は実行されました。

同志の助言及び忠告に対して深い敬意を抱いていると伝えて欲しいと、周恩来が小職に言って来ました。周恩来は朝鮮側にもNo四八の内容を通告し、又、毛沢東は一連の問題を協議するために、彭徳壊と金日成を電文で北京に呼んでおります。

五一年一月一三日

ロシチン⁽⁷⁾

この時期に金日成は、確かに、中国を訪問している。

それとある中国人専門家は、五〇年上旬に訪問したのは、朝鮮戦争に対する指揮上の誤謬を毛沢東に詫びるためだった、と書いた。⁽⁸⁾その誤謬とは、戦争の時期の判断の誤りを指し、毛沢東が仁川上陸を予測し警告したのに、それを聞かなかったと。前者はともかく、後者の場合は、毛沢東がその予測をしたと立証するに足りる資料はない。筆者には毛沢東が複雑怪奇な戦局を明確に判断できるほど賢明だったとは思わない。中国人特有の毛沢東崇拜論であろうが、これは事実に反する。

もし事実なら、こんな大事な事案がソ連に知らされず（そんなことできる相談ではなかった）、また、どうして当時の文書の中にそれが秘蔵されていないか、現に筆者所有の資料のなか

にも存在しない。また、訪問の時期にしても一二月と一月とは、随分違う。百歩譲って五〇年一二月と五一年一月と二度北京を訪問しているでしょう。中朝側がいかに優勢に戦争を進めていたとはいえ、大事な時期にたかが誤謬程度のことでわざわざ中国まで出向くだけの余裕があっただろうか。

むしろ自方有利に戦局が展開しているうちに休戦会談を首尾よく進め、そのためにの軍事作戦の進め方を相談するために金日成が北京を訪問した、と判断するのが順当であり、事実そうであった。それに仁川が軍事的戦略上も休戦会談の進展の都合上も重要な場所だと気付いたのもつぎの暗号文書で見えるようにかの『軍事的天才・天才的軍事戦略家で英明なスターリン』でさえ五一年一月三〇日になってからのことである。

「ザハロフへ（北京の毛沢東同志のために）」

彭徳壊に宛てた毛沢東同志の電文を受け取りました。同志の考えに賛同します。

攻撃する敵に対し、中朝軍が甚大なる反撃を敢行するためソウルと仁川地域の確保が最重要課題となります。国際的状况から見ても全くそうです。

五一年一月三一日

フィリポフ⁽⁹⁾

と、同時にスターリンは朝鮮戦争を有利に進めるための作戦練りを怠らなかつた。

五一年一月三〇日、スターリンは駐平壤ソ連大使・ラズバイエフに毛沢東に相談して兵士の人員増強と将校養成の件などをはじめ体制強化を確固とせよとの命令書⁽¹⁰⁾を出しており、これに対してラズバイエフ大使はスターリンに次の内容の報告書を届けている。

「(1)、スターリン同志の忠告は正鵠を射ている。

(2)、師団の増減並び改編については、順調である。

(3)、中共軍の師団は三個師団

なお、軍団単位の指揮本部減らしは、作戦上困難である。⁽¹¹⁾

軍の現在の配置状況は、

軍指揮本部一……肅川・平壤区間の確保の目的上

軍指揮本部一……平壤・ソウル間の半島、つまり沙里院、

海州、南川区域の確保目的

軍指揮本部一……ソウル確保目的

軍指揮本部一……元山・興南など東海地域の確保目的

軍指揮本部二三……中国軍司令部の配下にある

軍指揮本部一……予備 中略

朝鮮戦争の休戦会談

この他に海軍の配置状況や戦車隊の状況などに加え機械化師団など十四項目に関して明細に報告している⁽¹²⁾」。

ちなみに、五一年五月二九日の暗号文書は、金日成がソ連に申し入れた武器の一部を、ソ連の事情で搬入できなくなったことをスターリンは仄めかす。きつとソ連の経済事情が良くなかつたためであろう。

「ラズバイエフ同志

金日成を訪ね、同志を通じて手渡された小銃、迫撃砲など装備追加供給に関する申し入れは、確と受け取ったと伝えなさい。

金日成が申請したのは五一年の半ば、ソ連は人民民主主義国家への武装配当は二月に完了しているので、今金日成の要請を完全に充足させるのは無理だということです。六月いっぱい供給できるのは、カービン銃二五〇〇丁、自動小銃五〇〇〇丁、軽機関銃一二〇〇丁、迫撃砲七〇〇丁、一二〇ミリ迫撃砲一二五丁です。

ことの進展状況を電文で知らせなさい。

「フィリポフ」⁽¹³⁾

このときの中朝両国もソ連の、特にスターリンの泣き笑いによって万事が決まり、延いては国家の運命までも決められていた。すでに見たようにスターリンの金日成への唆しによって朝鮮戦争が始まり、仁川上陸によって北朝鮮が不利な状況になるや今度は毛沢東に兵隊派遣を命じた。スターリンの期待に見事に答えた毛沢東に対して、ソ連の経済状況が悪いという裏面の理由でマリクに命じて対米和平交渉に当たらせるなど……戦争勃発後一年足らずして一人の独裁者の恣意によって状況が急変した。

この辺で米韓国軍のほうに目を向けて見よう。

仁川上陸以後米韓軍は、全ての面で北朝鮮軍に優勢に戦争を進めていた。

マッカーサーは大量の武器、近代兵器、豊かな軍事物資をつぎ込んで、北朝鮮や中国を一気呵成に畳み掛け、一九五一年の春季には二度の大攻勢をかけて決着をつけたかったが、マッカーサーは腹心の部下（ブルドックの勇名を轟かせた）ウォーカー將軍を不慮の事故で亡くし、戦意喪失に加え意気消沈、トルーマン大統領との確執や米軍統合本部などの軍部との折り合いがつかず、ついに、解任の憂き目に遭うことになった。そのため米軍の士気は低下し、この隙に乗じて中共軍の南への大攻勢

は功を奏し、結果、防衛ラインはじりじりと下げられ、首都ソウルは取られる、など、何一つ好材料となるものはなかったである。

選手交替、マッカーサーに代ってマッシュュー・リッジウェー將軍が登場することになった。リッジウェー將軍は、就任後間もなく、再反撃を開始し、五一年一月二五日にサンダーボルト (Thunder bolt) 作戦を開始し二月までソウル付近に迫り、二月五日には更にラウンド・アップ (round up) 作戦に打って出、更に北上、三月四日には韓国軍司令官白善燁少将に命じ、ソウル再奪還に備えてソウル市内を探索させ、同月一八日ソウル入場を果たした。

こうして三月二三日より米韓軍の砲が火を吹き出した。所謂、カレッジジャラス (Courageous) 作戦を本格的に展開した。ソウルを挟んで南北二五キロ幅の、東部戦線の春川から加平、さらに清平を繋ぐカンザスライン (Kansas line) が更に北上し、四月五日にラッグド (Rugged) 作戦を仕掛け、春川西方の米軍第九軍団配下の韓国軍第六師団第七連隊が同日陣地を出て翌日に三八度線突破、米第一軍団は中共軍第二六軍を破った。俄然、米韓軍が優位に立つ。

その後中朝軍は二度の反攻を試みるも、三八度線で南北双方

の軍隊は膠着状態に入った。一方的に押しまくっていた中朝軍に、戦局を読み違えるという誤謬が生じた。

制空権は相も変わらず、米韓軍の手中にあった。そのため中朝軍は和平への一種の焦りを感じ始め、見当違いの作戦を繰り返すことになるが、現代兵器を具備した米空軍は、連日連夜北朝鮮戦線の後方の主要都市を空爆し、そのため中朝軍の輸送路は断ち切れ、空軍基地は莫大な被害を被った。⁽¹⁴⁾ ついに戦局我に味方せず、中朝軍はこれ以上戦争を継続することが無理だと判断した。

以上の事情を察知したヴィシンスキーは、国連に対して和平のための話し合いをなすべく安全保障理事会の開催を要求している。さらに同年六月二三日にはソ連の国連代表ヤコフ・マリクも、朝鮮和平について言及するに及んだ。

ところで米韓軍の反撃が成功して中朝軍を圧倒して三八度付近まで進撃できたのは、五一年六月一三日である。同日スターリンは毛沢東に対して次の電文を送ったが、ここでスターリンは、休戦のことを仄めかしている。『適時が有利』だと論しつつ、同時に戦争続行をも唱えている。こんな辻褄の合わない状況の裏面に、実は、深い訳があった、休戦に備えた実利取りと

いう……。

「北京のロシチン同志へ」

(この電文を即刻毛沢東に渡せ)

毛沢東同志

満州と朝鮮から来た貴国の代表との会談を、本日持ちました。そこで提起となった話題は、次の三つです。

1 休戦のこと(これは我が方にとって適時で有利と考えます)

2 軍事顧問のこと(同志の必要に十分応じられます)

3 六〇個師団への装備供給の件につき我が方に異論なしこれらの件につき間もなく同志の代表が同志に具体的に説明するでしょうから、ここに記しません。一六個中共軍師団中、少なくとも八個師団は即刻使用すべきでしょう。MIG一五航空師団中二、三師団だけでなく、爆撃機に対する対戦効率の高いMIG九の五、六師団を中部中国や南部中国の基地から直ぐに発進可能と思います。同志の戦線において八個の戦闘機師団だけでも戦線での必要を十分に満たすことが出来ると思います。我が方の資料を見ると、同志のパイロットも飛行出来ます。立派なパイロットは実戦で鍛え上げなけ

ればなりません。ソ連は実戦的パイロットを五、六カ月で仕上げましたが、中国でも七、八カ月あれば十分でしょう。：中略：会談時に余は英米側が対朝鮮国一六カ国名義で近々中国と朝鮮同志に対して休戦を提議する意向があることを知りました。

気をつけなさい、会談に臨む前に同志の軍隊に対して大打撃を加えようとしていますから。風説の可能性も真実の可能性もありますので、防衛を固め敵の攻撃に十分備えておくよう助言を付します。

フイリポープ

No 三〇二／暗

〔15〕

このときは、米韓側にも大きな変化があった時期でもある。アメリカでは対中空爆をも辞さないと言ったマッカーサーが解任され、五一年五月一七日には国家安全保障会議が開かれていた。『NSC四八五』なる案件が採択され『三八度以北の地域を多少とも拡大し、適当な時期に和平への話し合いへ持ち込む』との作戦を実行して、さらに休戦協定を結んで外国軍を撤退させる案件を相手に申し入れることに決定した。

同年六月一日国連総会で事務総長は、中朝軍を三八度線以北まで撃退でき、休戦の成立条件も揃った。平和と安全を確保

したからには、国連の目標が十分に達せられたと述べ、共産側に対して暗に休戦の可能性を匂わせた。

時相俟って米國務省顧問・ジョージ・ケナンとソ連の国連大使マリクは五月三十一日と六月五日と二度も会い、休戦協定の可能性について打ち合わせた。

以上のような経過があった後、六月二三日にマリク・ソ連代表はラジオを通じて『平和のための提案』という題目で『休戦と共に三八度線から双方の軍隊を引き揚げ、交戦国間で討議を始めよう』と呼びかけ、六月二五日には中国が、又同月二七日には北朝鮮が賛意を表明した。

韓国は、これに反対した。

六月五日の国会では、休戦反対の決議文が出され、六月一日には三八度線付近で『停戦反対国民総決起大会』を開いた。さらに六月二五日期朝鮮戦争勃発一周年記念大会では李承晩大統領が反対意見の発表、六月二六日にはソ連からの提案を正式に拒否、六月二九日には国会で停戦反対決議がなされた。以上の経過を経て六月三〇日には、韓国政府から『対米休戦五カ条件』が出された。

それは、

(1)、中共軍の満州への引き上げ

(2)、北朝鮮軍の武器解除

(3)、国連は第三国により北朝鮮への援助を禁止すること

(4)、韓国代表の、朝鮮問題討議の場への参加を認めよ

(5)、韓国主権を侵略する行為は、理由不問に反対、などであった。

当時の米ソの、南北朝鮮に対する態度から判断して、そのいずれもが稚拙で実現性の希薄なものだった。大国としてのアメリカの立場維持には、非情さをもって臨むほか手段がなく、正直な所、小国・大韓民国の立場などはどうでもよかった。次の暗号文書を見よう、こんな時もスターリンは強かな計算の上、中国や北朝鮮を停戦会談に臨ませようとしていたのである。

「北京 クラソフスキ同志

ソ連軍パイロットは、袖も捲り上げずにのんびりと朝鮮人を訓練しているのかね！

ペロフ將軍は中国人パイロットに対して実戦向けの訓練をさせずに上品な大学教授にでも仕上げる積もりかね？ 過去第二次世界大戦ではソ連軍は五、六カ月間の訓練だけで十分に役立ったのに、中国人パイロットは七、八カ月経っても駄目とは言語道断だ。慎重すぎるのも有害だ。潔く切り上げな

朝鮮戦争の休戦会談

さい！ 中国軍は（ソ連）空軍の掩護なしで戦わぬ。中国航空戦闘機八個師団を早急に養成せよ。これは同志の任務だ。

ペロフの一個師団を満州の朝中国境付近に、二個師団中の一個師団は北朝鮮の国内後方に配置することで中国戦闘機師団用の飛行場が戦線の近くに設置出来る。

これはどうしても必要だ……。遂行状況を報告せよ。

「フィリポフ」⁽¹⁶⁾

肝心の休戦の話はどこ吹く風とやらで、物騒できな臭い話を始めているようだが、実はそうではない、なにもこちらから攻撃を仕掛けることはないんだ、いつでも大攻撃に備えておけ、と警告している部分である。つまり、休戦と戦争の話を同時に並行して進めているのである。このときスターリンは毛沢東に対して、休戦に臨んでの『奇策』を授けているが、間髪入れずに毛沢東は、それを金日成と高崗に次の電文を送っている。

「……休戦問題を討議するにせよ、この件は今後二、三カ月後の中朝軍の防衛体制をどう築くかに大に関わるのだ。ここで我々が喧々諤々して見たって得することは何もありません。次のことを考えて見てはどうだろう。

同志社法学 五四卷六号 一二三（二二六七）

(一) 相手側が先に話題を持ち出すまで待つ

(二) ソ連政府がケナン声明に基づき休戦に関してアメリカ政府に対して照会する

この両案は同時に並行させることも出来るので、一方ではソ連政府が照会し同時に相手側が休戦問題を提起すれば、案件の取捨選択はフィリポフ同志に任せよう。

このことを同志ら連名でフィリポフ同志にお願いして見てもどうだろう。

(三) 三八度線境界の復旧を条件とした休戦の話し合い

南北双方にそんなに広くない幅の中立地帯を設定する(北朝鮮領内だけに設置するのは駄目) 南北朝鮮は相互に干渉しない、中国の国連加盟問題に関しては国連が実質的に侵略の道具となっているため中国には国連加盟に格別な意味を付与されていません。これを条件に提起する積もりはないが、台湾問題を出して見てはどうか、一考の価値があります。

アメリカが、台湾問題は別条で解決すべきだと強弁しできたら応分の譲歩をしますが、先ずは平和を期して朝鮮問題を解決しましょう。フィリポフ同志と相談してご指示を仰いで下さい。

(四) 鄧華同志と第二三軍司令官に対して、戦線に戻って現

在の戦線を固守するよう命令し、六月と七月に準備を敢行し、八月には大規模の作戦を始めます。敵が我が後方に大規模な上陸部隊を投入しない限り、間違いなく目的は達成します。

敵が新しく部隊を北朝鮮領域に前進させず上陸部隊を投入しなければ、八月には我が軍はもっと強くなっています。

(五) こちらは、空軍部隊を直ちに戦線に派遣する計画をしております。

毛沢東

五一年六月一三日

(17)

暗号電文の記録では、この書簡は、『二〇九手書き』の『スターリン・イ・ベ同志へ』(高崗・金)に次いでいる。以前にスターリンと毛沢東間の書簡を見ると、今後の作戦についてスターリンの決済を仰ぐために金日成がモスクワ間で出向く。そして高崗と金日成がその旨をスターリンに伝えたのは、五一年六月一四日である。

「イ・ベ スターリン同志

我々は毛沢東同志より回答電文をもらいました。お時間の

許す限り我々に接見して下さい。我々にかくなる栄誉をお与えになることを熱望します。我々は全ての問題を同志からご指示を頂戴したうえで解決を図りたいと存じております。

明日出発したいと考えております。

共産主義のご挨拶と共に

五一年六月一四日

高岡 金日成⁽¹⁸⁾

せん。物理的に不可能なので、なかったことにして欲しい。

…中略…それを充足させるには三年はかかると、ソ連専門家は言っております。…現下の中国師団の定員、組織構造などに関してもっと細密に他の電文でお知らせ下さい。

五一年六月二四日

ワイリポープ⁽¹⁹⁾

ここまでのところ、スターリンは子分の、毛沢東や金日成との約束に違えることをしなかった。実に頼もしい子分を、スターリンは持ったものだったが、次の文面では何か異変が起きているようである。

「北京 クラスフスキ同志へ

(毛沢東に手渡せ)

六月二一日に同志の電文を拝見しました。

(一) 同志もマリク演説でお分かりのように、休戦問題の提起に関する我が方の約束が既に遂行されました。休戦への進展が見られそうです。

(二) 六〇師団分の(軍需物資の)要請分に関して、我が方では今後一年間同志の要請に応じられそうにありません。

朝鮮戦争の休戦会談

第三章 カークとの予備会談

前章で『老人の健忘症』といったが、正確には『痴呆症』と書くべきであろう。

先の毛沢東へのスターリンの取り消しの実例は、朝令暮改でない『朝礼即改』、まさに痴呆症を裏付ける話である。また、筆者の推測の域を出ないが、この当時スターリンはそんな病状があったのだと信じ得る有力な説があった。残念な話が、これ

は自由主義国家への脱出に成功した東側の亡命者の話であったため、日本のように『社会主義憧憬病』に罹った『進歩的平和的民主人士』の多いこの国では信じてもらえず、タブーのままとなっていた。その善し悪しは日本人の水準の問題で、筆者がとやかく言うべきではない。

はっきり言えることは、過去の日本には真実を語る良識のある声がかき消され、老廃物に等しい社会主義信奉者らの跋扈が日本社会に多くの弊害を産んだ。いわば、社会主義固執病というもので、旧社会党や岩波・朝日文化人と言われる『進歩・民主』を掲げる御仁らはこの病気がかかっていた。なお悪いことには、年少者にもそれを蔓延させるということをやった。この時代のソ連経済が苦しかったことも、長い間『虚偽』と信じられた。

その実、当時のソ連の生産構造は、多量の軍需物資を要する朝鮮戦争への物資的要求に応じられ得る内容ではなかった。生産体制や設備は未熟で、生産に必要な原料や材料すらソ連の自力だけでは満ち足りず、周辺の衛星国家に対して半ば供出的に捻出させていた。

卑近な例を挙げると、昭和三〇年台に欧州でソ連製ゴールドが出回り、金価格の国際変動に少なからぬ影響を及ぼしたことが

があるが、このときのゴールドが北朝鮮平安北道の雲山で産出されたものであったことが欧州市場で判明した。また、以前本書で指摘したように、スターリンが金日成に対して鉛の供給を要求したり、その他の地下資源採掘を要請したりして、北朝鮮の地下資源が枯渇した。

このように一事が万事、社会主義兄弟国家の名の下にソ連は周辺の衛星国家から自然資源を搾取し、生産活動を継続していた。そんなことを、ソ連閣僚の中枢にあったグロムイコが知らないはずがない。だからこの時期に朝鮮戦争への軍事援助などにもソ連の限界を感じ、国連の名を借りた対米朝鮮戦争の和平交渉を始めようとしたことは、明らかにソ連のリバイバルを図った苦肉の策であったことが分かる。よって、何事にも優先して対米交渉に成功することは、スターリンからグロムイコに与えられた至上命令であったのである。

ちなみに、相手は、当時ソ連駐在アメリカ大使のカークである。休戦の本会談に先立った予備会談を行った訳で、言ってみれば、米ソ相互間のお手並み拝借、と言ったところだった。以下に紹介する内容のものは、両者間の会談内容をグロムイコがスターリンに報告したものである。

「カークに会いました。

(二)、彼はワシントン政府の指示でマリク声明に関するいくつかの問題提起の為に小職を訪ねて来ましたが、もっと詳らかに説明してほしいと言うことで……。

カークはマリクの声明の中で以下の点が気にかかると言っています。

マリクは『ソビエト人民を信じている』と声明したが、これはソビエト政府の正式の見解かと聞くので、小職は『ソ連政府の公式声明として素直に聴かれてはどうか、具体的に知りたいところがあれば、解明してもいい、と言ってやりました。

(二)、ソ連政府は和平措置を講じる考えがあるかと聞いたので、和平措置を講じるべきソ連政府の公式見解を述べ、『一九五〇年にイギリス政府が正式に平和調停の件につきソ連政府に接してきた、また十分なる誠意を示したのに英米両国政府から何の反響も示さなかった』と言いました。

(三)、カークは『停戦と休戦』との表現には格別な意味があるか、概念的に区別があるとすれば、意味上どのような違いがあるかと言うので、小職は『軍事行動の停止は朝鮮戦争に参加している国同士が臨時の軍事協定と結ぶべきだ』と言い

ました。カークは『段階的な平和調停の策定に何か関係があるのかと問うので、小職は『軍事行動の停止が平和調停への第一歩だ、これは自明の理ではないか、ただ、この協定に政府問題と領土問題を含めてはいけない、この問題は別次元で検討しよう、と答えました。カークは休戦及び停戦に関する協定の実行の監視方法に軍事行動の再開に対する保証を取り決める容易はあるかと聞きました。小職は『それは軍事行動の停止に関する協議の過程で当事者間で検討することは有り得る』と答えました。

(四)、カークはマリク演説文の『このためには当事者らが朝鮮問題の平和的解決の道に入る用意が要求される (This would require the readiness of the parties to enter on the path of peaceful settlement of Korean questions : 英文、筆者挿入)』の部分を読み上げ、『朝鮮問題の平和解決の道に入るとはどういう意味か、また、貴国政府は具体的にどのようなスケジュールを組んでいるのかと聞くので、軍事行動の停止に関する暫定的な軍事協定締結につながる平和調停への第一歩だ』と答えました。カークは停戦後の状態に関する突っ込んで質問してくるので、小職はそれは朝鮮の軍事紛争に関する国家群が決定することだ、と言っておきました。

(五)、カークはマリク声明は中共政府の見解も反映しているのか、またそのことはソ連政府の承知しているのか、もしそうだとすれば、北京の見解を具体的に発表する方法に関してソ連政府はどのような構想を持っているのかと聞きました。小職は、知らないが、知りたければアメリカ政府が中国政府の意向を知るべき努力をすべきではなからうか、と返事をしました。

(六)、カークはマリク声明はソ連政府が軍事行動の再開を防ぐのに十分な保証と休戦と停戦に関する協定を協議するため、に戦場で待機している司令部代表らとの会合を支持する用意があるという意味で理解して良いか、と確認を求めて来ました。

(七)、交戦国同士がこのような会談に参加すべきかどうか、とのカークの質問に、本職は一方は朝鮮戦争に参加している国家、つまり、アメリカその他司令部代表、それに南朝鮮代表であり、他方は朝鮮人民軍代表と中国軍の代表だ、と答えました。

(八)、カークは特に(七)に関する小職の答えに満足しているようで、『再度』マリク声明をソ連の正式表明だと理解し良いか』と言うので、『そうだ』と言ったら、納得したらし

く、『そうだね、多少不透明な部分はあるが……』と言いました。

別かれしな、カークは、ヴィシンスキーの健康を気遣っていました。会談に同席したのはアメリカ大使館のフリーズ参事官、パプロノベ、エマ同志でした。会談は英語でやりました。

外務次官 グロムイコ⁽²⁰⁾

第四章 ソビエトから中国への指令

朝鮮戦争のことについては、ソ・中間では全てのことを通じ合っていた。

スターリンの指示なしに毛沢東も金日成も動けなかった。戦争の継続か中止かの判断は、だから、当然スターリンがなすべきことであった。おおむね戦争のことは中国の与り知るところではなく、休戦のことをソ連に相談して決めることになった。休戦への歯車が軋み始めた五一年六月三〇日、毛沢東はスターリンに次のように相談している。

「フィリポフ同志

敵軍の司令官リッジウエーは、本日元山沖に停泊中のデンマーク病院船内での会談を申し入れました。交戦国代表同士でやろうというのです。会談開始と同時に、その応分の保障として軍事行動をやめよう、と提案して来ました。この点について小生は同志に対して以下の通りの意見を持つており、ここに披露させて頂きます。

(一)、七月二日から三日まで金日成同志はリッジウエーに対して回答を出さなければなりません。金日成同志はそれをもつて双方の代表が会談に同意している旨を相手に伝え、会談日程、場所、出席者などについて提示しなければなりません。

(二)、会談場所を『元山沖』とリッジウエーは提案しております。しかし元山には要塞化した海軍基地があり、敵が当地に上陸することは（軍事戦略上）良くないので、応じかねます。その代わり開城は如何でしょうか。

(三)、会談に備え準備を滞りなく整えるには時間がかかります。開催日を七月一五日にすれば万事好都合ですが、同志のご意見は如何でしょうか。

(四)、時間が差し迫っていますので、会議の有する重要さに鑑み、同志が直に連絡を取られ、会談をご指導になり、その結果を当方にも通報されますように希望します。 毛沢東

朝鮮戦争の休戦会談

No 三二六七 六／三〇 一六；五〇

こんなやり取りが毛沢東とスターリン間であったことなど、金日成は露ほども知らなかった。

金日成のスターリンに対する次のお追従ぶりを見よう。

「フイリポフ同志

六月二八日にUP通信ワシントン発の報道によれば、『アメリカの將軍及び將校間で朝鮮では停戦機運が日増しに高まっています。リッジウエー將軍は軍事行動の停止の可能性に関して、米國參謀總長（ハアメリカ合同統合參謀議長）と常に連絡を取っている。広く報道されているように、リッジウエーがペンタゴンからの指示があり次第会談に入り、これに関する通報は國連軍司令部が行う』ということになっています。これに朝鮮側はどう対処すれば良いのでしょうか。また、リッジウエーの会談場所の申し出に朝鮮側はどう答えれば良いのでしょうか。

同志のご意見を早急にお聞かせ下さい。 金日成

五一年六月二九日 No 三二六一

(22)

まるで『蛇に睨まれた蛙』の金日成である。しかし、不憫な子分ほど可愛いのか、スターリンは金日成に授けるべきご指示を、毛沢東に伝達した。その内容は、次のとおりである。

「北京のクラソフスキへ（毛沢東同志に手渡せ）」

『同志からの休戦に関する電文を受け取りました。』

余の意見としては、リッジウェーに対し休戦会談には同意だと、ラジオを通じて即刻回答したらいと思います。相手側には朝鮮人民軍司令官、中国義勇軍司令官の連名でサインして両者の連名で発送することは、アメリカ側に重要な意味を持たせることになります。元山沖のデンマーク病院船内を会談場所にするというアメリカの提案には、断固反対すべきです。三八度線上での会場を強く主張しなさい。同志たちが会談の当事者になるので、会談場所はアメリカが譲歩するでしょう。

この点を十分に留意され、次の内容の書簡を本日中にアメリカ側に送りなさい。』

『休戦に関する六月二八日の貴官の声明を確と承った。』

我々は軍事行動の停止及び休戦協定に関する会談のために

貴官の代表者らと会うことに同意する旨を貴官に声明する全権を委ねられている。

会談場所は、三八度線上区域内の開城を提案する。

これに貴官らが同意するならば、我が方の代表は七月一日から七月一五日間に貴方の代表と会う用意がある。

朝鮮人民軍司令官 金日成

中国義勇軍司令官 彭徳壊

日付』

同志の電文ではモスクワ政府が休戦会談を指導するように提案しておりますが、考えられないことであり、なおかつその必要はないでしょう。指導は、毛沢東同志！あなたがやるのです。

我々は精一杯個別的課題に対する助言くらいやりましょう。

当方は金日成とは、直に連絡を取りません。これも同志がやって下さい。 フイリポーブ

五一年六月三〇日 No三三五一

（28）

これで休戦会談の展望が一瀉千里に分かる。

最後の近いカギ括弧の部分は、国連軍に差し出す書簡のマニ

アルであるが、同じ内容の文章を、後になって中朝側はリッジウェー宛てに全く同様の内容の書簡を送った。このように、金日成は主役から外され、毛沢東主導で北朝鮮側の休戦会談での方針が決まることになる。

しかるに、以上のようにスターリンに虚仮にされた金日成のことを、北朝鮮公式の歴史では「偉大な首領さまの賢明な指導の下で全人民と人民軍隊に対する嚮導的（＝指導的）及び組織者的役割を正しく遂行された結果」、休戦会談が勝利的に導かれた⁽²⁴⁾、と盛んに持ち上げている。

この時期にケナンとマリクとが、休戦会談の地盤固めをした。会談も友好的に進んだようで、厭戦ムードの漂う中に戦争に対する大義名分を主張する気も薄れて行つた。

要するに、彼らは大人外交をやったのである。

ケナンの平和定着のための休戦論は中ソ両国に対して、また、マリクの演説は英米の国民世論に対して和平への雰囲気を作り立てた。カークとグロムイコ間の会談も、このような脈絡の中に判断すべきである。なお、ここで肝に銘じるべきことは彼らの外交事も湾曲な言い回しを駆使つつ、常識的線上で事を進めるだけで足りた⁽²⁵⁾ということだ。

他方、五一年六月二九日、アメリカ政府は国家安全保障会議

を開催し、休戦会談に臨んでの重要課題の取り決めを行つた。その結果を国家安全保障会議では、放送を通じてリッジウェーに伝達されたのは、東京時間で三〇日午後八時であつた。

「大統領は、以下のことを朝鮮軍司令官に通達し、同時に報道機関に対し公布を指示した。

『国連軍総司令官の名において、貴軍に対して、次の事項を通告する。

本官は、朝鮮における敵対行為の一切、武器行動などの中止を取り決める停戦及びそれを維持させるべき保障措置などについて討論する会合を開くよう貴方が希望していることを承知している。

本官はこのような会合を希望する貴方の回答を受け取つて我が方の代表を指名し、貴方の代表と会談すべき日程を提示することになろう。本会議は元山沖に停泊中のデンマーク病院船上とすべき旨を提示する。

国連軍総司令官 リッジウェー」

とまとめて中朝側に送つたが、その回答は、

「貴官（から）の六月三〇日付平和会談（休戦会談）に関する声明を受け取った。

権限を委任されている本官らは、以下の声明をもって貴官に回答を申し上げる。

我々は軍事行動の停止及び平和樹立の会談を期して貴方の代表らと会うことに同意し、その場所を三八度線上の開城にすることを提議する。貴方でこの案件に同意するならば、我方の代表は五一年七月一〇日から一五日間をその日程に合わせて準備する。

朝鮮人民軍司令官 金日成

中国義勇軍司令官 彭德懷⁽²⁶⁾

で、すべてがスターリンの差し金通りであった。

以後、休戦会談という朝鮮戦場での活劇芝居は、毛沢東という円形広場を中心に北朝鮮とソビエト間の往来が四方八方に広がるのである。

第五章 休戦会談中の軍事行動

このタイトルそのものもおかしいが、実際奇怪な事が起きて

いた。

休戦と軍事行動とが同時に進むとは、相反する行動方式である。しかし、良く考えて見ると、国際間の外交事は、騙し合で自国の国益を優先させる取り決めの実行動なので、双方間で神経が鋭敏になっているときなど、平和的話し合いに軍事行動が並行しあってもおかしくない。

戦間期の外交とはそんなもので、第二次世界大戦期にナチ・ドイツやスターリン支配下のソビエトの対日外交に見られるように、ある意味では『破るための規約』の取り決めが外交の一つでもあった。ここで次の資料を見て、ソ連の外交姿勢を垣間見、論評したい。

「エム・एस シュテメンコ同志

報告します。

(一) 交渉に際しての金日成の回答テキストは、金日成自身が外交系統を通じて送ります。それは五一年七月二、三日頃になりそうですが、これにはモスクワの同意が必要です。

(二) 朝鮮の代表には、朝鮮人民軍参謀総長・南日⁽²⁷⁾、外務相朴チヨンジュ⁽²⁸⁾、中国義勇軍司令官 彭德懷の三名で構成されます。

金日成同志はフィリポフ同志から次の各事項に対する助言と指示を仰いでいます。

a 発砲の時期と戦闘行為の停止日

b 三八度線より南北へ五キロないし一〇キロ限度で兵隊を引き下げること

c 停戦時より空、陸から三八度線を越える行動の禁止

d 朝鮮の領海より海軍の艦隊を引き上げさせ、封鎖を解除すること

e 一カ月以内に、朝鮮から外国人兵隊を引き上げさせること

f 捕虜交換、拉致された民間人の帰還のこと

ラズバイエフ

No 一七五一

一九五一年七月一日

(29)

早速返事が来た。

「七月一日 No 一七五一の電文、受け取りました。

朝鮮政府は電文で提議された問題について中国政府と合意した後で共同提案を決めるように金日成に伝えなさい。上記の電文を見る限り金日成の提案と毛沢東の提案とが合致して

朝鮮戦争の休戦会談

いないようです。

フィリポフ

No 四 / 三二〇八」⁽³⁰⁾

スターリンの指示通りに金日成は毛沢東と協議し、会談での議案 (AGENDA) について両者間で詰め合わせの作業が実施され、七月五日にはその内容を毛沢東がスターリンに報告したのは言うまでもない。第一回目の会談が双方間で行われた。さて、どちらの案件が採用されたか。

「フィリポフ同志

同志の参考になるよう朝鮮の停戦協定に関する草案を送ります。

朝鮮で交戦中の国連軍総司令官リッジウェー將軍（一方）、朝鮮人民軍総司令官 金日成將軍、中国人民義勇軍司令官 彭德懷將軍（他方）は、朝鮮における軍事行動の停止と平和樹立に関する会議に参加する代表を任命する全権を保有する。双方の代表は、次の諸点で意見が一致した。

(1) 一九五一年 月 日 双方は同時に発砲を発令する。そうなれば地上軍、海軍及び空軍は朝鮮半島内での発

同志社法学 五四巻六号

二三三 (二二七七)

砲行為や敵対行為を中止する。

- (2) 双方の陸海空軍は、三八度線一〇マイルの範囲でそれぞれが後退する。三八度線を挟んでの南北一〇マイルを緩衝地帯として設置する。同地帯での民間行政機関は一九五一年六月二五日までの状態に、つまり、三八度線以北を北朝鮮行政下に、その以南を韓国の法制下に復元される。
- (3) 双方は武器軍隊又は補充人員を外部から朝鮮へ輸送(陸上、海上、空輸)するのを停止する。
- (4) 双方は捕虜を送還する。停戦三カ月後にして数回で完全を送還し合う。
- (5) 中国義勇軍を含む朝鮮で交戦中の外国軍は二、三カ月以内の期限付で朝鮮半島から完全撤退を実施する。
- (6) 南朝鮮の難民は四カ月以内に以前に住んでいた地域に戻らなければならない。

毛沢東 No三三四九

五一年七月二五日⁽³¹⁾

ソ連の根回しの旨さに毛沢東の老練な駆け引きが功を奏した好例である。第一回休戦会談での、双方の合意事項を見る限り米韓側の交渉は不発に終了した。

まず緩衝地帯設定の問題から見ることにしよう。

会談場所を三八度線上の開城にしたのは、作戦上、中朝側の完勝である。

毛沢東の『朝鮮戦争勃発前の行政権』となれば、開城は当然南朝鮮側の施政下に入ることになるが、逆に北朝鮮側が開城を取った意味が如何に大きいか。板門店に行き、韓国側から南北軍事分界線のギリギリの地域から見れば、北朝鮮農村の状況は、一望千里である。

まず、どこかの国の映画村さながらの風景が眼前に広がる。

今の北朝鮮の状況はともかく、戦争当時の開城から先には、五穀豊饒の黄海道・延白平野まで広々と連なり、さらに甕津半島まで果てしない平原が続く。その先に広がる風景とはいかに、と一度くらいは想像して見たらいい。米韓代表は対北外交に失敗したが、実に惜しいことをしたのである。北側の要求を簡単に呑んだアメリカ代表も、また、拱手傍観の韓国代表も間が抜けていた。いまさらながら、好機を与えた米韓側がもどかしく、忍耐し難い義憤を覚える。

つぎに米韓側のスタートの展望の読みの甘さは、その後北朝鮮代表の南日らを助長させ、間もなく休戦会談に暗雲がたなびく結果を齎した。休戦会談の三年間、北朝鮮代表らの餓鬼じみた悪態振り(今もそうだが)を見れば、筆者の趣意が分かる

う。彼らの態度は、おおよそ外交とは無縁の空威張り、虚仮威し、虚勢張りなどが日常茶飯事で、国家を代表した者同士の話し合いの場とはとても思えなかった、それを、北朝鮮では愛国的行為と言うが……。

最後に毛沢東のいう『南朝鮮の難民』とは言語道断な金日成の圧政から、九死一生の思いで南に逃れ住み着いた人民のことである。難民ではなく、真実の自由民である。つまり、当時経済的に不自由な南朝鮮で、戦の中を喘ぎつつも、痩せ細った身を互いに寄せ合って、健気に生き延びた自由民なのである。彼らは、戦場のなかで生と死との間をさ迷いつつ、ある者は陸伝いに、またある者は生命をかけて海上から難を逃れて南にやって来た。

その南朝鮮として決して安住の地ではなかった。なぜ来たか？、南にやって来たのは、何事にもまして、精神的自由を求めたことだ。筆者も知る彼らは、毎日曜を教会で過ごし、平日は勤勉に働くというマックスエーヴァーのいう、禁欲的で勤勉なプロテスタントたちであった。

第六章 休戦本会談

休戦の備会談については、前にも指摘したように、マリク声明後に米中双方間で既に暗黙の了解が成立し、五一年六月二七日にソ連外務次官アンドレイ・グロムイコ、そして駐ソ米大使アレン・G・カーク間で『現地での野戦指揮官によって軍事問題に限って』行われるべきだと言明したので、韓国代表には白善燁少将を当てることにし、六月二六日にはリッジウエーは、韓国大統領・李承晩に会った。当然、休戦会談について相互意見の交換のためであった。

李承晩は『名分なき休戦には反対だ』とリッジウエーに対して猛然と食い下がった。しかし、『覆水盆に返らず』で、七月八日には開城で休戦会談に先立った予備会談が予定通りに行われた。当時交渉の役を勤めたのは、米韓側から米海兵大佐・J・C・マレー、米空軍大佐・アンドリュー・J・キニ、通訳には米海軍中尉・H・アンダーウッド、米陸軍中尉・R・アンダーウッド、米陸軍准尉・ケネス・ウそして韓国軍中佐・李寿榮らが参加した。これらの代表を、中朝側からは北朝鮮人民軍大佐・張春山、中共軍中佐・蔡成文が迎えることになった。開城

中国軍少将 謝芳

の場所は当時京畿道地方の大富豪・李賢在が所有した別荘・来鳳荘。中朝側から会談日程を七月一〇日に、双方から出席する代表名簿などを確認し合うことを提示し、米韓側がこれ了承、スムーズに予備会談を終えた。

ちなみに、アメリカ側は韓国代表を無視する態度を取っており、会談に反対の李承晩大統領との板挟みの状態に置かれていた当時の苦衷を、韓国代表をつとめた白善燁將軍はそのときのことを次のように述懐している。

『わたしは韓国軍を代表して会談に参加しておりますが、韓国政府が休戦会談に反対している以上韓国の軍人として政府の意向に従う義務があります。代表を辞めます』と大統領に申し入れたが、慰留された⁽³²⁾』

五一年七月一〇日一一時定刻に本会談が始まった。

会談に参加した双方の顔触れは、次の通りである。

米側

中朝側

海軍准将・ジョイ (C. Turner Joy) 人民軍大将 南日

空軍少将・クレীগ

(Laurence C Craigie) 人民軍上將 李相朝

陸軍少将・ホッジ (Henry I Hodge) 人民軍少将 張平山

海軍准将・バーク (Arleigh A Burke) 中国軍大将 鄧華

北朝鮮代表の南日及び李相朝は、朝鮮人民軍人としての経歴はなく、北朝鮮政府急造の政治軍人であった。また上将とは、大将と中將の間の階級で、有事の際に金日成が『恣意でかつ随時』につくることができる。北朝鮮の軍人階級の場合、特に軍歴無用、国家の有時の際民間人も『將軍』になることがよくある。戦争など全く経験せず鉄砲一回撃ったことのない金正日が『將軍様』とは、北朝鮮の恰好の例である。

休戦の予備会談であった滑稽な話を一つご披露しよう。

当日のことである。

中朝側は国連軍代表が乗る車輛の前に白旗を付けるように要求した。理由は国連軍代表の車輛だと人民に分からせるためだというのだ。結果はこれは人民には米帝国主義者らが偉大な人民軍司令官に降伏し、命乞いに来たと宣伝する好材料となった。何事に優先して会談成功を希望する国連側が、こんな非常識な要求を呑んだのは多言を要すまでもない。

次は会場での話だ。

双方が座る椅子の高さが同じであった。これは当然のことである。ところが、北朝鮮代表の南日はもっと高い椅子を持っ

て来させて、その上に座って自分の存在を誇示した。また、会場の北朝鮮の旗が国連の旗と同規格なのが気に入らない。我が方に米韓側より大きな旗を持つて来させ、カメラに納め宣伝用に使用した。

実に笑うにも笑えない情景の頻出する会場で、しかも救い難い相手と話がスムーズに進む訳がない。中朝側は米韓側の発言に対して、一々悶着を付け、餓鬼じみた態度で駄々を捏ねる。今の北朝鮮の南北会談や他の国際会議などによく見られるように、これを北朝鮮支持者は愛国的行為というが、程度の低い破廉恥な話である。

このように休戦会談は前途多難なスタートを切った。

七月二六日には会談に際しての課題選択に入った。

問題となった主なものは、

(1) 議題の選択

(2) 休戦の監視方法及び機構

(3) 軍事分界線の件

(4) 捕虜に関する協定、などであった。

重要度優先順位に検討することになった。

最初軍事分界線及び非武装地帯設定の問題から入った。

米韓側は、現在双方が接している線に沿って軍事分界線を描す

べきで、戦争で何度も蹂躪された三八度線を主張するのは無意味だ、海上及び空中の融雪状態に鑑み、現在の分界線よりも以北三〇キロか五〇キロの海州から長箭に連なる線が望ましい、と提案した。つまり、米韓側が事実上対北制海権及び制空権のことが頭にあつて、暗に北朝鮮側に譲歩を要求しているようであつた。⁽³⁸⁾

しかし、実際の状況は、五一年七月三〇日現在京畿道汝山北方西海岸から中部の金化（現在は北朝鮮行政区域の両江道）を経て高城（同じく北朝鮮行政区域）に至る線上にあつたのである。当然北朝鮮代表は、これを一蹴した。

ところが、五一年八月四日、不思議な事件が発生した。中立地帯の開城地域の会談地の市内を中共軍部隊が通過したり、八月七日には事前予告なしに中共軍トラックが開城市内を通過したため、米韓軍が掃射する事態が発生した。当然会議は紛糾し、十月二四日まで会議は開かれなかった。

七月二五日には突然米韓側から、会談場所を開城かた板門店に移そうと提案した。

内心欣喜雀躍したかったのは中朝側、勞せず獲物が手に入つたからだ。

戦後アメリカが朝鮮半島に進出して以来良く見せていたよう

に、休戦会談の過程でアメリカが残した最大の汚点であった。朝鮮の地勢を实地検分もせずに、無知なアメリカの将軍どもが朝鮮政策を決定したからであろう。戦略上開城は南朝鮮の生命線と言えるほどその占める位置は重要であった。

そうして七月二七日には、軍事停戦委員会及び中立国軍事委員会の構成の話に及んだ。主題は休戦成立後の軍事力増強問題。特に兵力交替のことをどうするか。米韓側は『休戦後一定な兵員数のみの交替と装備の補充ができる』との提案に対して、中朝側は『兵員交替は駄目、外国軍兵士の撤退だけを決めればいい』と応酬、さらに飛行場建設の件では、米韓側が『休戦後の新設は禁止する』と主張、中朝側からは『新設又は補修も可能』と切り返した。

しかしこの問題はさほど重要な案件ではなかったらしく、同年一月二十九日には、飛行場は民間に対してのみ許容され、中立国による制空権の監視の件は放棄するということで双方が決着した。

最後に最難関だった捕虜問題に触れてみたい。

会談課題中、巨済島捕虜収容所事件に見るように、大変な紛糾を呼び込んだ。

中朝側が最も懸念したのは、捕虜交換問題、つまり交換比率

は当然1:1、捕虜の各自が自己意思に基づいて選択した国へ帰る、ということ。至極当然の話が、なぜか彼らは嫌なのであった。

それは、簡叙すれば、かれらは捕虜扱いにおいて既に中朝側では国際法違反行為を犯しており、捕虜の性格についての国連側の分析結果に対して言い逃れが効かず追い込まれていた。ちなみに、中朝軍の捕虜の場合、人民軍の捕虜の大半が南朝鮮出身者で、李承晩政権から赤色分子として睨まれたり、あるいは一発勝負打って出て名を上げようという功名心の高い者たちが北朝鮮の仕組んだ義勇軍に入って大半を占めており、また、中国の場合、従来の主張のように『勇敢な中国人による精鋭の義勇軍』ではなく、その殆どが在中朝鮮人の子弟か、元の国府軍だった。特に元国府軍兵士の場合、内戦も終わり、家族の待つ台湾に帰りたいのが人情であろう。また、北朝鮮政府は捕虜の中で捕虜としての人権保障を主張したり、反抗的な者は、殺害しており、これが明るみに出ることを、北朝鮮政府当局は極端に恐れていた。

以上の事情の下、米韓側では中朝側に対して捕虜名簿の交換を求めた。

それから約五カ月経って捕虜名簿を見ると、米韓側の一三

二、〇〇〇名に対して中朝側はわずか一一、〇〇〇名（韓国軍七二〇〇名、米軍三、〇〇〇名）、これは「一騎当千の名將軍・金日成」の沽券に関わる大問題だ。これでは『無能將軍』、となるがそれでもいいのか、当時のことを、『迷將軍』・李相朝は、「志願者を募って人民軍に再教育して戦場に送ったり、民間に組み入れたために数が減った」と、苦々しく後述した。何とも締まりのない話である。真実は、一部は殺害し、また工場労働者として利用したり、炭鉱や重労働を要するなどの強制労働に駆り出すための戦力として、米韓軍捕虜を利用していたのである。奇怪なるかな、こんなウソを証明する記録が北朝鮮の『朝鮮労働党歴史』（平壤、朝鮮労働党発行、三一五頁）中にあった。

「敵らは（アメリカをはじめ国連軍を指す―筆者）三年間の戦争期間中に米軍四〇万五千名余りを含め百五十六万七千名余りの兵力を殺傷捕虜にされ、一万二二〇〇台余りの飛行機、五六〇隻余りの艦船、三二五〇台余りの戦車及び装甲車、一万三千台余りの自動車などの莫大な量の戦闘技術機材や軍需物資の損失を被った。」

これは、前後不覚な記事、北朝鮮がいかにもいい加減な国家かを実証する記事があった。韓国の有力の月刊誌『月刊朝鮮』九

四年一二月号によれば、つぎのようになる。

一九九四年十一月のある日、朝鮮戦争当時韓国陸軍少尉として勇敢に戦っていた趙昌鎬氏が中国を経由し韓国に帰った。彼は朝鮮戦争当時歴戦の勇士であったが、不幸にも捕虜となり、長期間収容され、強制労働をもさせられていた。その後北朝鮮を脱出し、四〇年振に懐かしい生地・ソウルに帰った。彼によれば、捕虜となった当時「解放戦士」として四、七万人が釈放され、鉱山や集団農場あるいは統制の対象区域の工場などで最低の賃金をもらって生き延びていた。今も当時の一〇％程度の生存者がいるそうだ。

昔の生えた戦争の話とは言え、金大中政権は、趙元少尉の話を真剣に耳を傾けて生き残りの捕虜の善後策を講じるべきであった。大統領の金大中は、元趙少尉のご苦労をねぎらうところか、金正日が機嫌を損ねはと気兼ねし、歴戦の勇士の無視して素知らぬ態度を通し切った。

五二年一月二日に捕虜解放の件を、双方が再検討することになった。

このときも米韓側は捕虜と民間人捕虜は自分の希望によって帰還地を決定し、送還すること、交換比率は1:1の原則で、また捕虜が現地で決めた国への帰還を拒否すれば現地で釈放す

ることとし、民間人は自己希望で帰還地を決定すべきだ、と提案するが、中朝側は『無条件帰還させよ、奴隷取引でもあるまいに……』と強弁、結果、五二年五月七日まで持ち越しとなった。

第七章 巨済島捕虜収容所

五二年五月九日に巨済島捕虜収容所では、捕虜の暴動があった。

その原因は、当局側にあったのではなく、前章で述べておいたように、北朝鮮政府による米韓軍捕虜に対する虐待及び殺害事実を隠すため画策された陰謀にあった。中朝側では、この事件を『捕虜に対する非人道的な国際法違反の悍ましい事件』と断定したが、人道主義に反する犯罪を犯したのは、むしろ北朝鮮の方だった。

以下は、この事件を資料に基づき真相を筆者が管見した記録である。

巨済島は釜山より西南の方面にある島である。

金泳三前大統領の出身地であるこの島は、東南は東海に囲ま

れ、西は巨済海峡をはさんで統営郡と忠武市があり、北方を馬山、鎮海などが隣接している。住民は半農半漁、人口は一三万ほどで島全体の面積は三八三、四四平方キロメートルである。一九五二年現在この島の人口は一一万、収容された捕虜の数一三万だというから反乱でも起きたら、それこそ一大事であった。

捕虜収容に際して、アメリカ政府は相当神経を使ったのは事実で、捕虜との疎通を図るために警備の一部を韓国軍に任せていた。次には待遇の面では十分に配慮され、特に捕虜には所内での自治権まで認めていた。捕虜らはそれを奇貨に、北朝鮮労働党巨済島収容所支部まで組織し、次のような行政組織がいのものを持ったいた。

第一課 政治・保衛部

第二課 組織・計画

第三課 警備

第四課 扇動 (一九五一年五月から実施)

捕虜身分で党の組織まで造作なくやつのくとは、全く前代未聞である。

こんな不思議な話も、謀略専門の北朝鮮にとって見ればなんでもない話であった。

前章で紹介したように、米韓軍捕虜の数は合わず、これをごまかす方法がなかった。それを交わす方策として、アメリカが巨済島に収容されている捕虜たちを非人道的な扱いをし、ジュネーブ協定違反していると宣伝して国際世論を起こすことであった。その作業に備え金日成一派は、大物労働党幹部の派遣を始めた。そうして派遣となった※李學九なる人物（別名朴士賢）、一説によれば金日成と共にソ連政府が差し出したプガチヨフなる船で解放後間もなくソ連から帰った『甲山派一味』の一人であるというが、朝鮮によくある風聞とやらで、真相のほどはよく分からない。肩書は、巨済島支部政治委員会委員長。

かれの下に司法的組織とも言うべき人民裁判部があり、制裁方法としての刑罰の種類に、笞杖徒流死じゃあるまいに特級（被告を石かこん棒で撲殺）、一級（棒で五百回叩く）、二級（棒で四百回叩く）、三級（棒で三百回叩く）、四級（棒で百回叩く）などがあったが、三級以上の刑罰に処せられた者は十中八、九は死んだ。

後で分かることだが、その捕虜を李承晩は約三万名も自己政策の正当化する手段として愛国反共捕虜として釈放した。大部分は韓国当局から厳しく監視された。しかし、優遇したはずのかれらの中には、二重スパイとして北朝鮮のために働き、李承

晩の恩を仇で返す裏切り行為・スパイ活動に加え、韓国社会不安を醸し出す攪乱を企てている者がいた。

収容所内での破壊活動が最も著しくなったのは、五二年五月六日の暴動であった。事の発端は、こうである。

捕虜たちは例のとおり一日の日程を終え各自室内に戻るときは、定例検査の身体検査を受ける。日常的に行われるボディ・チェックの筈だったが、この日の彼らの挙動は明らかに不審であった。この日に限って彼らの身体から禁止品のものが次々と出て来る、タバコ、指輪、鉛筆数十本、時計四個、歯磨き三個……などをわざとさらけ出す彼らの態度がいかに反抗的で且つ挑戦的であった。

五月七日には代表李學九の名において収容所長宛に抗議が行われた、捕虜にたいして行われた定例検査が人権蹂躪だと言いつ、収容所長との面会を求めてきた。

お人よしのドッド准将、李の要求を受け入れて面会することになった。

ちなみに、捕虜側からの要求事項は、

(一) 捕虜の衣服、食料、薬品及び必需品などの配給量を増やせ

(二) ソ連を中立国として、国連側は受け入れよ、

などで、理不尽な要求を突き付け二〇分ほどの押し問答があった。

これは拉致をカモフラージュするためのもので、実のねらいは別にあった。

李は配下の捕虜に目配せし、ドッド所長を拉致してしまう。

ほんの一瞬の出来事であった。驚いたのは駐韓米軍第八司令部である。当司令部が即刻これに対応した。司令官・ヴァン・フリード中將は、東京の国連司令部と連絡を取り合つて、司令官のリッジウェー大將と善後策を練つた。リッジウェー大將は武力行使を行つて捕虜の鎮圧を命じ、間拔けなドッド准將を直ちに更迭、後任にコルソン准將を当てた。（間もなくリッジウェー大將はNATO軍司令官に就任決定、後任のクラーク將軍と交替し、羽田を離れる）コルソンは李學九と交渉し、ドッドの釈放に引き換えて捕虜側の要求を聞くことになったが、李は、

（一）捕虜に対する虐待中止（国際法に則り人権・生命の尊重）

（二）捕虜の強制送還を実行せよ

（三）捕虜審査の即刻中止

（四）捕虜の代表団との話し合いに応じよ

（五）捕虜と収容所当局間にホットラインを設置せよ、

などと要求した。

しかし、捕虜らの要求は、単なる名分的なものだった。

というのは、米政府はこれらの捕虜を収容した際、米食を主食としてカロリー計算まできっちり行い、捕虜に対する物資も十分に与えていた。皮肉な話が、当時麦飯もろくに食えなかった韓国国民よりも栄養状態は良好だった。当局からの回答は、

（一）は認めない、虐待の事実がないから。（二）は板門店で双方代表が話し合うべき事項であつて収容所長が云々すべき筋合いのものではない。（三）は実現可能だが、その前提としてヒューマニズムに則つた措置を講じるべきだ、こちらに抗議するよりも貴方で先に考えるべきだ。（四）は収容所当局が考える問題ではない、（五）は受け入れる、と言う内容であつた。

これに対してしばらく捕虜側からは何の動きがなかった。

ドッド釈放の件にしてもタイムリミットが近づき、在韓米第八軍司令官・ヴァン・フリード中將は五月九日になつて『ドッドを本日中に釈放せよ、さもないと、国連軍は直ちに実力行使に出る』と警告し、同時に米韓軍は威嚇のデモンストレーションに出た。重装備の兵士、戦車の隊列がドッドが収容されているであろう七六棟周辺を取り巻く、おもむろに七六棟に仕向け

られた大砲の口などは、いまにも火を吹きそうな様相を呈していた。

果たせるかな、当日九時三〇分にはドッド准将が釈放された。当日の鎮圧部隊の指揮官は、ボートナー准将。全部隊が陣取る中、収容所内は緊張状態に包まれていた。ボートナーの見る収容所内は、修羅場であった。ボリウム一杯のスピーカー、その中を流れる赤旗歌、北朝鮮国旗を高く掲揚しプラカードを手にした捕虜らは所内を行進する一方、シユピレヒーコー、どこからともなく運び込まれた数百枚のスターリンや金日成の肖像……今にも惨劇が繰り広げられそうな險悪なムードが漂っていた。ついに双方は、無用に、激突した。

七六棟の捕虜六〇〇〇人中一五〇〇人は手製武器を手にして抵抗を試み、その他の者は丸腰で米軍に立ち向かった。双方は撃ち合ったり、戦車にぶつかったり、体一つで銃弾の飛び交う中を突進してくる……。こうして死者三一人（アメリカ人兵士一人死亡）、負傷者一四三人を出して暴動は収まった。ちなみに、五二年六月二〇日当時国連側は、捕虜収容所の地下に隠されていた武器、槍三〇〇〇本、ガソリン手榴弾一〇〇〇発、刀四五〇〇本……などを発見した。

（※以上の記述は、駐韓米軍三〇年史・ソウル新聞社、二二六頁、Matthew B Ridgway (マッシュ・B・リッジー) の The Korean War (Double Day & Company) 「朝鮮戦争」熊谷正巳／秦恒彦共訳（恒文社）、原爆か休戦か：丁 一権 日本工業新聞社などを参考にしたり、当時同収容所に収容されていた筆者の従兄の話などを総合し、記述した。）
後日談だが、李学九は、故意に捕虜になったという説がある。

『朗報があった。李学九というちよつとした大物が、多富洞で米第一騎兵師団に投降して来たのだ。肩書は北朝鮮軍第十三師団の参謀長、前身は「六・二五」南進のときは中東部戦線で第二軍団の作戦を練った作戦部長として知られている。投降のみやげに耳寄りな情報をくれた。』第一三師団の現兵力は一千五百そこそこ、八月後は韓国で強制徴募した「義勇軍」が七、八〇%を占めている、師団と連隊間の通信が不通で統率が効かず、戦車はゼロ、砲は一二〇ミリ迫撃砲五門など十四門に減り、これすら弾丸が不足し思うように撃てない、食糧が一月来半減して兵士らの体力がなくなっており戦局の不利、米軍の砲撃、迫撃などで士気が上がらず、督戦隊と北出身の幹部らが目をいからせて内部からの崩れをや

つと防いでいる、第一三師団は十七日くらい、現戦線を死守せよと命じられているが、もはや浮足立って壊滅直前の状態である、以上の実情は、ほかの十二師団すべてに共通している、とみてさしつかえない。』(丁一権：前掲書一六四頁)

これを見ると、李は、単なる『垂れ込み専門』の並の捕虜であつたことが分かう。

巨済島事件当時捕虜司令官として颯爽と人民軍の捕虜を指揮した当時の状況に比べ、なんと情けない姿勢であろうか。舌も滑らかにべらべらと北朝鮮内情をよくしゃべっている。金日成の部下に限らず、南側の将校だって『我が方に利あり』とせば、直ぐに態度を変え、敵と味方を入れ替えてしまう。全く魍魅魍魎な連中で、日本人拉致疑惑を語る北朝鮮元工作員擬(もどき)の話である。

第八章 会談の無期延期

北朝鮮の陰謀の『巨済島事件』は、失敗に終わった。

韓国大統領・李承晩は釈放した三万名の愛国反共捕虜も、その後長期間に亘って韓国の捜査当局は監視対象とした。不穏当な思想の持ち主、というのが理由だったが、以後朴正熙時代ま

で連座制が続くことになる。左翼運動に加担したりそのシンパなどは、無条件に当局の監視対象とされ、徹頭徹尾マーク、就職も進学も、あるいは外国に出ることもままにならなかった。本当の対象者ならまたしも、何の罪のない市民・農民・労働者などの多くが一カ所に集められ、集団虐殺される状況を、当時、朝鮮で筆者自身目撃した。

筆者にはこの当時に犠牲者となった親族がたくさんいる。

清濁合わせの韓国の民主化運動指導者らのように、温いオンドル部屋の中から酷寒の冬空の下で身を晒して死と直面しつつ戦き、暴政に抗争している貴い人民に対して温かい所にいてエールを送るような不遜な話ではなく、時代の同伴者として発言である。

筆者の、幼い時分ではあつたとは言え、南朝鮮の所謂『革命劇』の中にか弱い人民が引きずり込まれ、昼は人民共和国、夜は大韓民国と、二つ政府間を往復するような日々を強いられていた。共産主義社会を理想としながらも、共産主義とは何かを知らない似非革命家もたくさんいた。おかげで今、革命歌の轟いた場所に無辜な人々の墓石が無数に立ち並んでいる。

過去に筆者は、朴軍事政権の手先機関・駐大阪韓国総領事館から『不逞在日』と目され、故郷に帰ることができなかった

が、八七年六月朝鮮戦争終了後三七年目にしてようやく故郷の土を踏むことができた。感極まるその故郷は悲痛の歴史の中で風化していた。見渡す限り墓標、墓標、墓標……そんな平原を歩き回って墓参を済ました。胸が引き裂かれる切ない思いであった。筆舌に言い尽くせない悲しみ、半世紀間胸の中で燃えだぎっていた憤怒、心身両面に重くのしかかった重圧等が胸を占め、やり切れない思いで無言のまま英霊の前に立ったとき、何かしら喉の奥から、震えながら込み上げてくる悲しみを、今も忘れることが出来ない。

ちなみに、巨済島で解放された『愛国反共捕虜』に李承晩は真実に自由を与えなかった。名目は愛国反共捕虜ではあったが、自己の失政をこのような思想的取締によって国民の批判をそらすため彼らを利用した。その後の朴正熙も、そうであった。

大韓民国の正義は、常に執政者にあり、人民はいつも悪である。そして善と悪のはざまを南北朝鮮の政治は揺り動く。大統領独裁の韓国、あるいは首領専断国家の北朝鮮などでは通例であり、権力者の恣意による不条理が闊歩する状況は、古今何ら変わることはない。

巨済島事件後、国連軍の中に大きな人事異動があった。

当時NATO軍総司令官アイゼンハワーが共和党から大統領に立候補することになり、米政府は、その後任にリッジウェーを充てた。対ソ戦略上NATO軍を手薄な状態にしておけないというのが理由で、空白となった地位をマーク・クラーク大将が埋めることになるのである。

クラーク將軍は一九四五年から四七年までオーストリアで高等弁務官をしていたが、当時、西欧の自由国家に狂風を吹かせていたスターリンを相当震え上がらせた。彼は厄介な問題解決に貢献した実績のある人物であった。当時休戦会談において韓国代表を勤めた白善燁將軍の話によると、八カ国語を話すことが出来、非常にリーズナブルな精神の上、強心臓の持ち主であったらしい。共産国が良くやる、『難癖づけ、言葉尻で隙を付け込み一字一句文句を付けるなどの外交』は、この人物が登場することによって断固と封じ込められ、本気でやる気を共産側に見せ、逆に隙を与えないという姿勢を強烈に印象づけた。

顧みれば、それまでの国連側代表は、物事の判断に際して煮え切らず軟弱で、しかも相手の虚をついて奇策を弄するような余裕のある人物はいなかった。その意味でクラーク將軍の人は、得体の知らない北朝鮮代表・南日などのような、外交家と

しての礼儀も常識もない相手に有無を言わせずにマイペースで進めるには最高であった。

就任早々、クラーク大將は米統合参謀本部議長に対して

「会談に臨み相手が理不尽なことを言つて来れば、こちらから会談を一方的に打ち切れば良い」と献策しているが、朝鮮に関する真面目な現状分析をしたことのないへつぱり腰のトルーマン政権は、それを『時期尚早』と一蹴した。

共産外交には充分な経験の持ち主でかつ信念の人・クラーク大將は、右のようなトルーマンの意見に従わず、五二年五月三一日には、どのような態度で中朝側が休戦会談に臨もうとしているのか、つぎのようにまとめ上げ予測される事態について米統合参謀本部に報告した。

(1) 捕虜審査終了後に送還を希望する捕虜が何人いるかを相手に報告するまで会談回数を減らすこと、(2) 通告の捕虜人数が盛り込まれた国連側の提案を、中朝側が承諾しない場合には、それを受け入れるまで国連側は一方的に会談の休会を宣言すること、と。

これに対して「二、三日程度のボイコットなら」という条件付ながらクラーク案件に賛成する旨の回答が来た。意気軒昂のクラーク大將は、米韓側代表のハリソンに対して、「従来通り

相手側が高圧的態度に出てくれば、こちらから一方的に会談の打ち切りを宣言せよ」と言った。

間もなく会談が再開される。

このような北朝鮮代表の姿勢は充分予想出来たことで、案の定、米韓側は会談の打ち切りを宣言した。豆鉄砲を食らった鳩のように、北朝鮮代表には事の顛末がさっぱり読めない。そうこうして四カ月が過ぎたにも、相手側から何の返事がなかった。ついに米政府も決断の時が来たと判断し、トルーマンは「中朝側が米韓側の提案を受け入れるまで無期延期せよ」という通告がハリソン代表のところに届いた。このときハリソン代表が最後に提案したのは、次の通りである。

(一) 送還に反対の捕虜は非武装地帯で釈放し自由に選ばせる、(二) 送還に反対の捕虜はいったん中立国に送り南北の何れを選択させる、(三) 捕虜を交換する前に名簿を突き合わせて検討し、捕虜各自が自分の帰りたい国への出国が可能かどうか案配する、などであった。

ハリソンの提案に対する中朝側の返答すべき期限は、一〇日であった。

果然一〇月八日に南日の回答は、

「捕虜の再調査及び收容所の訪問のことは承知するも、自己意思による送還の案件には反対である、捕虜は当然強制送還とすべきだ。」と例の通りまくし立てた。

米韓側代表・ハリソンは、「もはや貴方に言うべきことはない。貴方に分からせる方法はひとつ、この席を立つことだ」と毅然と答え、直ちに退場し、その後長い間双方は会談を開かなかった。

こうして延べ二〇〇回、かかった時間数三四五を浪費し不毛に終わった。

それまで世界中から注目を浴びていた『板門店』会場には、雑草が伸び放題、だれも訪れることのない荒れ地と化した。

五二年一一月のアメリカ大統領選挙で共和党候補アイゼンハワーが勝った。

大統領就任前の五二年一二月二日にはソウルを訪問したが、撤退に先立って朝鮮半島状況を調査すること、撤退後の在韓米軍をどう増強するかを研究するためであった。

アイゼンハワーは一二月二日には米第八軍司令部（旧ソウル文理大学舎）を訪問し、そこで米統合総本部議長ブラッドレー大将、国連軍総司令官クラーク大将、米第八軍司令官ヴァン

・フリード將軍、韓国軍代表白善燁少將らを招いて会議を開き、休戦に引き換え、韓国に軍事力を増強するのに如何なる方法が最も望ましいかを討議した。このとき韓国側の白少將から米軍の減少人員の分だけ韓国軍二〇個師団の増設を提案し、韓米双方間で合意を見ている。

五三年一月二日、アメリカではアイゼンハワーの新大統領就任式が行われた。

それ以後トルーマン行政政府が積み残した問題『名誉ある撤退』を如何に実現するか、その前提条件として冬眠中の休戦会談をいかに蘇生させるかであった。

この動きに相俟って、新國務長官ダレスとアイゼンハワーとがウエキー島で会談を持った。

課題は、第一、休戦会談が遅々として進まなかったら場合、朝鮮半島から台湾まで範囲を広げ、同海峡の防備対策をもしつかりと備える、第二に、これに加えて満州地方への空爆、場合によっては核兵器の使用も辞さずの政策実現についての話し合いが行われた。

事実上決裂した会談の糸口をつかもうと米韓側では中朝側からの返事を待つが、ナシのつぶてで、じりじりしていた米軍は一方では平和攻勢、他方では武力攻勢と、両面作戦に切り替え

た。

五三年二月一六日、米韓軍は爆撃機二〇〇機を北朝鮮領内の、兼二浦まで送り込み、北朝鮮軍事施設を破壊した。更に同年二月一八日にダレスは中朝側に対する威嚇との読み取れる声明を発表、アメリカの当座の政策は朝鮮とインドシナ半島において名誉ある終結に合わせて中共に対しては海上封鎖を敢行する、ということであった。追い打ちを掛けるようにブラッドレー議長も、朝鮮戦争の解決策として、

- (1) 米韓軍が戦闘において主導権を握り中朝軍を圧倒せよ
 - (2) 決定的勝利を期して若干の軍事的措置も取り得る
- などと発表し、『若干の軍事的措置』という核兵器使用も辞さずと仄めかすことをも忘れなかった。

他方ソ連ではスパイによってもたらされた情報によって、アメリカが核兵器を保有していることは既に報告された。当時の核兵器に使用する原子砲は、口径が二八〇ミリで在来式砲台でも戦術的核弾頭弾でも使用可能で、二千ヤード範囲内の陣地を一気に吹き飛ばせる威力を持っていた。生前のスターリンは、このことを充分に承知していたが、これに対抗できる武器がソ連になかった。

五三年三月二五日、モスクワ放送はこう伝えた

「レーニンの戦友、レーニンの偉大な承継者、人民の聡明な師であり、指導者のスターリン同志は、心臓の鼓動を中止された。」

共産主義の巨星・スターリンは堕ちた。共産主義国家の総本山・ソビエト連邦にはスターリンの健康について触れた者は皆無だった。独裁者の生死については触れることはご法度の上、場合によっては命取りになり兼ねない。問題はスターリンの後継者を誰にするかにあった。

当時のソ連共産党最高幹部に面々と言えば、マレンコフ、ブルガーニン、ミコヤン、フルシチョフ、ヴィシンスキー、ベリヤなど、どれを取って見てもジェネラル・マネージャには相当しない。不要な混乱は避けたいと考えたのか、ソ連共産党最高会議は、取り敢えずマレンコフを葬儀委員長に選出し、急場を乗り切ってから体制固めすることにした。このような状況下にあつて、北朝鮮などは蚊帳の外、『偉大な師』を失った金日成は先行きが定まらず混迷した。

こんな状況の中、同年三月二八日に金日成、彭徳懷の連名で国連軍総司令官・クラーク將軍宛てに、「捕虜交換に同意する意思あり。目下休会中の休戦会談の再開を希望する。」という

連絡が入った。急転直下、共産側の事情の転変に国連側は驚いた。

「(一) 傷病捕虜交換についての、クラーク將軍のメッセー⁽³⁴⁾ジに対して肯定的な回答を示せ、

(二) クラーク案に対する意見表明は、金日成の名において発表し、中国側はそれを支持せよ、

(三) 平壤→北京の発表後モスクワはこれを支持する声明を出す。

以上ソ連閣議決定

一九五三年三月一九日⁽³⁵⁾

中朝両国は、戦争に対し自己判断で動ける訳がない。すべてがソ連の差し金によって動かされた傀儡に過ぎなかった。当然『金・彭連署の声明文』はここに挙げない。事の成り行き上の時間的ずれはあっても内容は同じ。一字一句たりとも中朝何れも各々が工夫して自主的に発表したことは一度もない。

金日成にとってスターリンは、頼りになる師匠であると同時にいつやられるか分からない恐ろしい独裁者でもあった。従ってスターリンは金日成を呪縛して来たのだから、スターリンの

死は金日成にとって自由解放を意味する。

このとき金日成はこう言った。

「ここまで来れば、戦うかあつまり引き下って平和攻勢に出るかしかない。こんな風にズルズルと続けるのは朝中側にとって得策ではない。戦線と後方では毎日三〇〇名から五〇〇名の死傷者を出しており、捕虜の件にしてもアメリカを相手に頑張るのは得策ではない。」⁽³⁶⁾

ところで、休戦会談に漕ぎ着けたクラーク將軍は、対共産国家の外交上非常に重要な教訓を残してくれた、共産主義国家の常套手段とも言うべき『駆け引き、脅かし、虚偽威し、相手の言葉尻を掴んで虚をつく』などのやりかたには断固と臨み、確固たる態度を示すことであつた。

クラーク將軍の言うように、『硬直した、ゆとりのない、一方的な主張しかない国家を相手に外交交渉に臨んだ場合には、当方にはこれだけの力があると見せたうえ、本気でやる気を示し、相手が聞き入れない時は強硬策に出る』⁽³⁷⁾のが上策であろう。対北外交の場合、大いに参考にすべきだろう。

第九章 休戦実現までスターリン指示

スターリンの生存時、毛沢東は収置き、いわゆる『禁治産者・金日成』はスターリンに対して苦言を呈すること一切できず、常に上意下達に甘んじなければならなかった。

しかし、毛沢東は事情が違う。

戦闘経験豊かな上、アメリカを背景にした蒋介石軍隊を破り中国革命に成功した実績がある。戦争に際しては情報分析の能力あり、自ら死闘を経験し、また、軍事作戦にも長けていた。スターリンも毛沢東の実力を認めており、時折毛沢東が異存を挟んでもスターリンは介意せず冷静に受け止め、時には賛辞さえ贈ることがあった。

この章で述べる内容は、晩年に差しかかったスターリンが、独りよがりの、身勝手な、然も、観念的な作戦を練って、毛沢東に命じるも毛沢東は盲従せずスターリンの矛盾点や非現実的な面を指摘している部分である。

「フィリポフ同志

朝鮮休戦の調整会談以後五回も会議を重ねた結果、我が代

表と国連軍代表間で以下の三項目について合意しました。

(一) 緩衝地帯設置の為に朝鮮での敵対行為をやめる基本条件として双方の軍事分界線を画定する

(二) 停戦と休戦を設定して、その履行状況を監視するための機関の設置及びそれらの権限と機能を含む朝鮮における停戦実施と休戦設定に関する具体的な施策

(三) 捕虜対策：外国軍の朝鮮からの引き上げ問題と軍事行動及び平和協定までの協議とその範囲は含まず和平協議の解決まではいったん保留すべきだと主張しており、これを議題に入れと、断固と主張しております。我が代表は敵の、このような主張に反対しましたが、譲歩する様子は全く見えません。ケナンとマリク間の対話：現在進行中の協商中の模様、朝鮮と極東に関連する、あらゆる状況に鑑み国連側は朝鮮においてのみ軍事行動を停止すれば戦場での今後の損失と戦争の長期化から免れ得ると判断しているようです。朝鮮からの外国軍隊の引き上げを初めその他諸問題についても相手側が引き続き緊張状態を維持しようとしているのも、自国内での強制動員及び対外膨張を有利に図ろうという目的でやっているようです。

和平とは空虚な言葉です。

相手が停戦後に発生するすべての問題を、国連で審議することを我が方は認めないでしょう。たとえ平和会議が開かれるとしても、相手側が戦争当時と同じく朝鮮から外国軍隊を引き上げ、それに付随する他の問題を未解決のままに残される可能性が考えられるからです。

例えば停戦が実効化し、一定な時間が立つと軍隊の一部を引き上げさせることはあり得ますが、停戦協定の中に数回かけて朝鮮から外国軍隊を引き上げるといふ条項を加え、その条項を実行する段になると、予想外の事態が発生することになります。

相手側は、極東地域において政治的に緊張状態を維持するのに必要な要素を失うので、外国軍隊の引き上げには応じないでしょう。

以上の諸事情を勘案して我が方は朝鮮からの軍の引き上げの事を検討しなければなりません。過去我々は南北朝鮮を個別的に復活させるのに三八度線における軍事行動を停止するよう求めました。現在我が軍隊が北朝鮮から敵を追いつくことができて、南朝鮮の地域で同じことが出来ましようか。持久戦の場合、敵に対して大きな損害を与えることができませんが、我が方も財政に強烈な打撃を被ることになりますの

で、南朝鮮から敵を追いつくという所要目的は達成出来ても、やがて中国の防衛力の増強が困難になります。……現状では耐え得る可能性はありません。

会談が決裂となれば、双方は数カ月間戦うことになるのです。三八度線の事で和平協議ができなくなれば、敵を三八度線南にじわりじわりと追い詰めて我が掌中に主導権を握り再度休戦協定に臨めば良いのです。朝鮮から外国軍隊の件で和平協議が決裂するにしても、数カ月間戦争をやって和平協議を再開し敵側には我が方に有利な条件を飲ませば良いのです。これには停戦課題にこの項目を含めないことが緊要です。そうでないと、不利な状況に追い込まれます。新たな和平協議も決裂となれば、外国軍の朝鮮からの引き上げの件の解決、つまり、南朝鮮から敵が出て行くこと、これですが、現状では遂行することは不可能で、問題解決には長期間の戦争を覚悟しなければなりません。このように複雑な状況に対する小生の分析に基づいて新しい見解、つまり、困難で長期的な軍事行動を推し進めて問題解決を図るよりは、外国軍の引き上げを停戦の必須条件に提示して見ては如何でしょうか。マリク同志も双方が三八度線から軍隊を引き揚げることこそ平和解決への第一歩であり、その完遂こそ軍事行動問題

の解決後の協商の対象となる、と言っております。停戦会議の議題にこの点を盛り込むことを第一義にして、将来の合意よりも今同意し米軍の台湾撤退問題、対日単独講和条約、日本の再軍国化問題などと同次元で我々の武器となるよう、この問題を以後に解決すべき課題として残した方は得策だろうと考えます。

同志が小生の提案の中で正当性をお認めになれば、その旨をご回答の受理後金日成同志の同意を得た上で我が方の代表に対して新たな指示を与えるつもりです。

また同志が反対すればそれに代わる同志の見解を開陳され、ご指示を頂きますことを要請します。
ポリシェビキ的挨拶とともに！

毛沢東

No 三六五八

五一年七月二一日⁽³⁸⁾

ここに挙げた毛沢東の、スターリンに上げた意見書は、朝鮮戦争での作戦遂行に大きな契機を醸すこととなった。毛沢東はスターリンに対してかなり思い切ったことを主張している、『和平は空虚なり』と。

これはマリク・ケナン会談が何を意味し、米ソ間で暗々裏に

進んだ和平への歩み奇りに対して多少不満を漏らしているとも読み取れる。また、外国軍隊の引き上げの件にしても、直截簡明に言えば双方は綱引きをするだろうから、いつそのこと三八度線で双方の軍隊をつなぎ止めておいて軍事行動を止めておけばいい、よしんば、双方が引き上げに賛成したところで検証することそのままにならない、と強調している点などは的を射た発言と言えよう。

以上のことは、戦場で塗炭の苦しみを経ている中朝軍の現状について何も知らずに、温い部屋の中で戯言を言っているスターリンに対する静かなる抵抗の声とも聞こえる。それに中国の立場からして、米国に飛んでもない新政権ができあがっても、日米講和の件に纏わった、台湾の大陸への進攻、日本の再軍備など、実に頭痛の種ばかり、危機が日々高まっている感じのするなかで鎬を削っている毛沢東の苦悩を我々は垣間見るのである。

第十章 ついに休戦協定建議案、纏まる

一九五一年一月一九日付けの暗号文書を見ると、朝鮮休戦交渉に関するスターリンの草案が先ずソ連共産党中央委員会に

おいて採択されその抜粋部分を、毛沢東に送っていることがわかる。金日成の立つ瀬がない。いつの間に朝鮮戦争の主役が代わっているのである。この事情は米国の、韓国に対する態度も同様で、李承晩は虚仮にされていた。ちなみに、ソ連政府は議案を書き上げて次のような経路を辿った。

- ① 毛沢東が建議する
 - ② スターリンの検証
 - ③ 毛沢東に伝達する
 - ④ 金日成及び彭徳懷に通告する。
- 次に挙げる資料を見れば、このことがなお明確になる。

「クラソフスキへ（毛沢東同志に手渡せ）」

『毛沢東同志』

朝鮮休戦についての同志の意見書を確と受け取りました。現下の交渉状況に関する同志の評価に同意します。交渉の進行状況に鑑み、アメリカ側は協議を延ばしているが、それは彼らが早い終結を一層必要としていることを明示しているのです。これは国際情勢の全般からとも言えることです。我が方は今後も協商に対して悠然とした態度で構え、急がず早期解決に関心がない振りをして頑なに我が路線貫徹を

朝鮮戦争の休戦会談

主張すれば良いのです。境界線の画定と少々の境界地点での監視設定に関する同志の立場が正しいと思います。監視機能の遂行に関する同志の立場は全面的に正しく、敵はこれに対する理論の提示が困難となるでしょう。軍事捕虜の交換問題における同志の立場も、同志の意見も全面的に正しいのです。

休戦締結後の朝鮮問題の今後の解決のために会議を招集し、考えられる方案としては現在協商中の双方の政治代表らが会議を招集し、北朝鮮と南朝鮮の代表を必ず参加させることが最もふさわしく思います。

フィリポフ

五一年一月一九日⁽³⁹⁾

スターリンは実際の戦場のことを理解していない。中国の意見をよく理解もせず、状況の流れるがままに勝手気ままな話ばかりしている。朝鮮戦争の、ある意味で張本人であるソ連が朝鮮の戦場において血一滴流さずに『飛び道具』を朝鮮や中国に売って、しつかり儲けている。次の文面に見ることにする。

「毛沢東同志」

同志社法学 五四巻六号

二五三（二二九七）

軍事顧問及び追加装備供給に関する同志の電文に関連して、次のように御通知申し上げます。

(一) 顧問の件：援助義勇軍総司令官配属の軍事顧問五人を十月上旬まで北京に必着するように適格者を選抜するよう国防省に指示しました。軍司令部に配属する軍事顧問は派遣しない、という従来の意見を堅持している。それは実戦状況下に軍顧問の任命の場合、部隊にしながら軍の戦争行為に対して責任を負うことになるので、部隊長の指揮権に傷が付く結果になりかねないので、結果的には軍の指導改善に役立たないからである。

(二) 追加借款の件：六億ルーブル使って弾薬と軍用資材を一九五一年末まで供給する件については、生産と輸送の面から判断して、九月八日付請求の分の五分の一の規模で追加供給すると同時に六個師団分及び兵器装備の供給を半年間延期する条件があつてこそ、同志が希望した一九五一年度中に供給要望分の五分の一の軍用資材に関する追加発注を受けることが可能である。

上記の借款を受け付けて検討し、その充足の可能性及び実行日取りなどを後日同志に通知することになります。

フィリポフ

一九五一年九月二六日⁽⁴⁰⁾「

前にも述べたが、五一年一〇月と言えば、双方間で腹の探り合いが盛んに行われた。端的に言って休戦会談を如何にすれば自分の方に有利に導けるかにすべてがかかっていた。北朝鮮が会談会場を開城にして、軍事上有利に立ったのもそのひとつ、また開城では都合が悪くなり今度板門店に変えたのもそうした工夫の一策であつたが、不利を承知の上で会談維持に必死になった米韓側にも別の計算があつた。

朝鮮休戦会談に限っていえば五〇歩百歩である。

こんなときも、北朝鮮政府は、二枚舌を使う。衣の下に鎧を隠すような事件が発生したのである。五一年一〇月八日、中部戦線の楊口北方の金日成高地では双方の軍隊が衝突し、隙あらばいつでも攻め込むという油断ならぬ状況が続いていた。

北朝鮮は会談の話しそちのけに、戦争をやる気でソ連に軍事物資の援助を要請している。

「パリシイエフ同志

報告します。北朝鮮政府はソ連政府に対して、以下の事を要請しております。

三個歩兵師団用の武器供給、自動車一〇〇台、飛行機Tu
2（ツボレフ）の供給

金日成はフィリポフ同志に報告するよう要請してきました、今後の援助の事は、金日成が直に会ったときに約束することになります。現在のところ、これらの事案に関する実際の対応は北朝鮮政府に通知しておりません。これらの事案に関する、その供給と実施時期などについて、同志からの指示を要請しています。

ラズバイエフ

No三〇六九

一九五一年一月一七日⁽⁴¹⁾

早速返事が来た。ここで金日成は意外な事実を知る。トンビに油揚げ攫われた、意外な事実を金日成は知る。

「金日成同志

余はしばらくモスクワを離れておりました。三個師団分の装備の、朝鮮への供給につき会談が遅れたのもそのためです。以前にモスクワで毛沢東同志を含め三者会談があったとき、中国の高崗同志から言われたのは、朝鮮軍の三個師団分の装備を中国への輸送分に含めるようにとのことで、ソ連側

朝鮮戦争の休戦会談

もそれに同意しました。

その後中国の都合が変わり、六十師団分に変更となり、ソ連側は即応、当時朝鮮への輸送分を送っておりますが、どうなったのでしょうか。中国同志の理由は設置き、朝鮮同志の要求を中国が聞き入れない場合は、余のところまで直ぐに連絡しなさい。

フィリポフ

五一年一月一三日⁽⁴²⁾

どさくさ紛れに、中国は朝鮮へ輸送分をチャッカリせしめていたのである。

スターリンは真相を究明すべくしてラズバイエフを介し北京のザハロフに命じ、毛沢東に事実如何を質すようにしたようだ。

「ザハロフ同志（No四／四三七四について）

（一）同志の電文は、五一年一月一四日に金日成に手渡した。

（二）個人的会談の中で金日成が言うには、中国側の取り分の中から朝鮮が受け取るべき三個師団用の装備を、ソ連側で

同志社法学 五四卷六号

二五五（二二九九）

は間違いなく中国が朝鮮に手渡ししているとはかり思っていたので、ソ連政府は中国政府にそのことは触れなかった、(これを中国側に通告したところ、中国は)その辺りを調査確認してから追ってその結果を通知するとのことです。

(三) 五一年十一月一四日(今日) 金日成は三個師団分の装備を、毛沢東に要請する内容の電文を送りました。

ラズバイエフ⁽⁴³⁾

双方の和平交渉のたけなわ、これに反し、いつ非常事態が発生しないとも限らない緊迫した状況の中で生きた椿事である。金日成はトンビに油揚げを攫われ、取り戻して当然の兵器装備などを毛沢東から返して貰ったという記事は、筆者所有の暗号文書の中にはない。よく調べると、つぎのように毛沢東が金日成をうまく言いくるめている記事が見当たった。

「フィリポフ同志

朝鮮人民軍三個師団分の装備供給の件につき、小生は毛沢東同志と照合しあい、毛沢東同志から次のように回答を貰いました。

『(中国軍は) 朝鮮戦線で追加的に弾薬・武器・資材などを

ソ連から調達して貰わなければならなくなり、ソ連に要請したところ、ソ連からは今年の末までに歩兵一〇個師団分の装備を出荷することになりました。しかし、実際には四個師団分しか届いておらず、残りの六個師団分来年四月まで延期となった。それで入荷分を九月中に中国群に配備した。今年中に休戦が決まれば、朝鮮に派遣中の中国義勇軍部隊は中国へ帰還することになる。

以上の状況に鑑み、小生の考えでは朝鮮が残りのソ連の装備を受け取り、それを朝鮮人民軍第二師団に配備し、又残りの一個師団分は来年四月我々がソ連から新たに物量の援助があったとき、追加して朝鮮軍に手渡すことになろうと思います。

同志の意見をお聞かせ下さい。

毛沢東

小生(金日成)は、諸般状況に照らし、毛沢東同志の提案に同意しました。

金日成

平壤市 五一年十一月二七日⁽⁴⁴⁾

以上の文面を読む限り金日成は毛沢東のしたい放題、肝腎の『残りの装備』はどうなっているのか。

次の電文に出ているように、毛沢東はスターリンに対して朝

鮮に供給すると約束した。もつとも朝鮮側に手渡されるのは七カ月遅れとなるが……。

「クラソフスキ同志（毛沢東同志に手渡せ）

『我々は同時に同志に歩兵一〇個師団分の装備を与えるべくして検討を加えた結果、

同志が要請した弾薬については、全面的に遂行することができない事情にあります。五分の一なら何とかありますが、今年の半期で完納できるとは言え、残りの分については、目下のところ無理と判断します。 フイリポーブ

五二年七月二四日（受付及び伝達状況について報告せよ）⁽⁴⁵⁾」

同書簡が金日成に手渡されたのは、同年七月二五日、もちろん口伝。これに対して金日成はラズバイエフを介してスターリンに次のような電文を送り、感謝と要請を同時にやった。

「二、朝鮮人民軍に自動車がなく、高射砲は火砲牽引車なども同時に配置してほしい

二、連隊には指揮系統用の技術装備を配備させてほしい

朝鮮戦争の休戦会談

三、ツボレフ型機は、ソ連から朝鮮人パイロットに引き継がせ、彼らに操縦させ満州まで来させる

四、飛行機毎にソ連の搭乗指導員を一名ずつ専属させ、その指導員が朝鮮人パイロットの移動の任務を指導すること。

№二三一五 五二年七月二五日 ラズバイエフ⁽⁴⁶⁾」

第十一章 会談直前の根回し

（その一）毛沢東の場合

一九五二年七月一六日に毛沢東が休戦会談に関する自己意見を開陳する書簡を送ったが、同年七月一七日にはスターリンがこれに大いに賛同し、その後の休戦会談の進め方を、全面的に毛沢東に一任しようとしていることがわかる。

「毛沢東同志（クラソフスキを介して）

我々の休戦協議での立場は、全面的に正しいと考えます。

我々は、本日、金日成同志からも、同志の立場に同意しているという通知に接しております。

一九五二年七月一七日⁽⁴⁷⁾」

猜疑心の深いスターリンが、急に毛沢東を好きになる訳がない。毛沢東が奈辺でスターリンに何事かを申し入れ、それにほれ込んだ『暴君・スターリン』がにんまりとほくそ笑み、快哉を叫んだに相違ない。まず、毛沢東が金日成を口説く場面から見よう。

「フィリポフ同志

今年の七月一五二三：〇〇、金日成同志宛の、小生の電文と今年の七月一六日二二：〇〇小生宛の金日成同志の電文を同志に送ります。

『金日成同志へ（写しは李ゲヌン同志に⁽⁴⁸⁾

我々は李ゲヌン（李克農）同志に電文を送り、その後今年の七月一四日一八時〇〇分に同志からの電文を受け取りました。二日間検討の結果、敵が我が方を攻撃している状況に鑑み、敵の方では実際には何も譲歩しないことは明白で、挑発的でかつ欺瞞的な敵の提案には同意することができません。そこで肯定的側面と否定的側面とに分けて考えて見ましょう。

敵の提案を受諾しないのは、朝中人民の兵士にとって立場が日々悪くなって行くばかりで、一向に得にはなりません。

同志社法学 五四巻六号 二五八（二三〇二）
ん。戦争が始まれば、話しは変わります。

中国は朝鮮を助け、朝鮮人民は平和を擁護する陣営の最前線で戦い、大いなる犠牲を払いつつ、三八度線区域と中国の東北区域を死守しました。

特に朝鮮人民と中国人民は武力によるアメリカ帝国主義者との闘争で鍛えられ、経験を得る機会に恵まれました。

…中略…

一方世界平和の支柱たるソビエト連邦は、自ら建設を強化することができ、世界各国人民の革命進展に影響を与え、同時に世界大戦の延期を意味するものと考えます（原文のまま―筆者）。かくも偉大なる動きがあるのは、朝鮮人民が孤立していないことの証拠であり、就中、中国人民は朝鮮人民の難関克服に努力する所存であります。

最も何が必要か、同志が率直にそれを答えるべきです。それが我々同士で解決できないことなら、フィリポフ同志にお願いしましょう。敵の提案を受諾することは、最悪の毒素を齎すことになるのです。

第一の証拠は、敵の爆撃の下では、敵の挑発的・欺瞞的な提案を受け入れることは我々にとって政治的にも軍事的にも不利な立場に追い込まれるのです。敵は我々の弱点を

突き、プレッシャをかけて来るに相違ありません。不利な状況に置かれれば、敵が圧倒することができず、さらに大きな障害を乗り越えなければならぬのです。

つまり、現在の情勢下での敵側の提案を受諾したら、敵は調子に乗り、我々の威信は地に堕ちるのです。受諾しない場合も、会談の決裂はおろか無理してまで会談を進めようとは敵はしません。遅れた方が、却って、我々の立場が固守でき、敵から新たな譲歩を引き出せます。その過程で我々は軍事行動を続行し、その過程の中で情勢を有利に転換せしめ得る糸口を見出すべきです。

フイリポフ同志にこのことを知らせ、ご意見を伺って見ましょう。

回答あり次第、結果を同志に知らせます。

挨拶を捧げます！

五二年七月一五日

毛沢東⁽⁴⁹⁾

毛沢東なりに良策を出してはいる積もりだが、如何にも独善的である、国連には通じなかった。

金日成の答えを見ることにしよう。

「毛沢東同志

同志の電文を細かく検討した結果、我々全員は次のように意見の一致を見ました。

同志の分析は正しく、(同志が)我々の現在の立場を熟慮され、我々に遠慮のない援助を申し出るよう配慮されたことに對し深く感謝します。長期間の戦いで軍事行動を具体化して行く必要があると、我々は考えます。そうでないと、旧態依然と同じことの繰り返しをすることになり、我々は敵から完全に無視されて軍事的に劣勢に立つに相違ありません。従って、我々は次のことを緊急対策として実施してくれることを提案します。

(一) 最小限度十個師団分の高射砲隊の増強して、平壤市、水豊発電所、清川江発電所、赴川江発電所などの他に重要な産業施設などに対空対策を強化すること

(二) 空中戦闘の積極化を図ること、それには次のことが必要十分条件です。

a 空軍司令部の改善、朝鮮領内の空中戦の指導

b 航空部隊の行動範囲は鴨緑江を境目に限らず平壤まで延長し、首都と重要産業施設のために対空防衛の強化を図り、万策を講じる必要あり

c 夜間爆撃航空隊を敵陣内奥まで送り込み空中戦を展開し、敵陣の飛行場、倉庫、兵営及びその他の軍事施設の爆破

上記の意見をご検討の上、当方への支援を決定して下さい。

同志を真実に尊敬している金日成

五二年七月一六日 二一：〇〇⁽⁵⁰⁾』

No二〇八四

五二年七月一八日⁽⁵¹⁾

自己判断のできない金日成は、毛沢東から『安易な妥協は破壊につながる』と聞き、進退兩難の日々を送ったのである。

(その二) 金日成の場合

北朝鮮にとつての休戦会談を野球に例えるならば、総監督はスターリン、監督は毛沢東、ヘッドコーチは金日成、休戦会談での北朝鮮代表の南日はボールボーイに過ぎなかった。金日成は、戦後アメリカの極東政策の裏をかいて朝鮮戦争を始めるまでは良かったものの、マッカーサーの仁川上陸作戦以後全く鳴りを潜め、中共軍が参戦してからの戦場での指揮権は完全に毛

沢東に移ってしまった。以後は中ソ両国の指揮どおり朝鮮の戦局は変遷し、両国の都合で北朝鮮の国家としての運命は決定した。無能なくせに戦争好きな金日成は、中共の豊富な軍事力に加えソ連の現代的武器の援助があれば、戦争を続行可能だと思ひ込むが、この点、南朝鮮の李承晩も同じであった。

「尊敬するイオシフ・ビサリオノビッチ!

同志及びソ連政府がいつも朝鮮人民に対して施される援助と配慮に対して、限り感謝を表します。通信手段が消耗し作動しません。我々は軍隊の運用組織などの面で重大な困難を来しております。別添に記す通信機器の部品及び使用上の機材を朝鮮人民軍の為に放出して下さいように切望します。なお通信手段には、次の点で問題があります。

(一) 戦闘開始当初の、人民軍の通信手段の保有率は40〜50%程度でした

(二) 一九五二年に通信機器と部品の入手手段がなく、ソ連からの供給もなかったのです。

(三) 上記の通信機器は一九五三年度の調達計画にも予定されていず、さらに困難でした

(四) 戦域や戦争行動が複雑になるにつれ通信機器部品の消

耗が深刻です

(五)で、中国から入れようと思いましたが、中国にもありません。

(六)十個師団分の高射砲の装備は貰いましたが、通信手段がないので、困っています。以上の事情を勘案され、同志及びソ連人民が朝鮮人民に対して上記の要請をお聞き下されば、どんなに嬉しいことでしょうか！

親愛なるイオシフ ビサリオノビッチよ！

同志は人類全体の幸福のため、朝鮮人民は同志が千年も万年も長寿であられるよう祈願し、同時に朝鮮人民の至誠をお受け下さいますようもう一度要請します。

同志に対する深い畏敬をこめて

金日成

平壤

五二年二月二九日⁽⁵²⁾

金日成のお世辞も稚拙ながら、それを聞き入れ喜ぶスターリンも尋常ではない。孤独な独裁者には、齒の浮くような言葉でも十分満足するものだ。

さて、金日成の言う『朝鮮人民』が要請している至急調達品とはなにか。

「添書

機材

朝鮮人民が非常なる欠乏を感じ、至急調達してほしい通信

- (1) エルエル無線機 一〇〇台
- (2) カ・ベ・エム受信機 五〇台
- (5) エ・ジェ・エス一、五 七五台
- (4) タイー四三 受話器 五〇〇台
- (5) ペ・テ・エフ電線 一万キロメートル
- (6) 真空管：グー四、二〇〇個 ゲ・カ・エー五〇〇、三〇個 ゲ・カ・エー一〇〇、二四〇〇台 ソー二五七 七五〇〇個 ソー二四一 一四〇〇個 ニカニエム 二三〇〇個 六カ七 二四〇個 六八八 一五〇個 六エフ五 一二〇個 六ジェ七 一二〇個 六ペー三 五〇個
- (7) ラフ型無線機、モーター部品 一〇セット
- (8) エル・エス・ペ型無線機 モーター部品 二〇セット
- (9) ペ・ジェ・エス一、五 部品 五〇セット
- (10) タイー四三型 小型受信機 コード 四〇〇個
- (11) タイー四三型 電話機用 コード 四〇〇〇個
- (12) エヌ・カー三〇型 交換台用 コード 二〇〇個
- (13) ベ・カー三〇用 プラグ 二〇〇個

- (14) ベ・カー三〇用 コンセント 二〇〇個
- (15) エム・カー一〇 カプセル 四〇〇〇個
- (16) ペー・ジェ・ア 無線探知機用 一二台
- (17) テ・ケ・エイ一三〇〇型 無線探知機用 真空管 一三〇個
- (18) テ・ケ・エイ一三〇〇／八型 無線探知機 真空管 三〇個

- (19) ゲイー一型 無線探知機 真空管 一八個

この他にニペーレア型 無線探知機 真空管 一八個

金日成⁽⁵³⁾

このとき時勢を読み取れない金日成は、戦争をやる気だった。借金の上塗りのはずなのに、ソ連は対朝援助の美名でどんな武器を売った。原初形態の武器ひとつ作れない北朝鮮が、ソ連を頼りに戦争を遂行した結果、現在のような地球上の最貧国家に成り下がってしまった。

戦争遂行者間で交わされた暗号文書の幾つかを、その証拠として、ここに出して置く。

「イ・ベ スターリン同志

一九五一年九月八日付けソ連閣僚決定及び商品サービス、非貿易費用支払い用の総計六〇〇万ルーブルに上る対朝鮮借款供与に関して、一九五一年一月一四日付けの北朝鮮政府との協定に基づいて、双方は朝鮮物産の提供により上記の金額の償還期間を一九五二年に合意しなければならないと考えております。平壤在駐のラズバイエフ大使は、金日成首相と会談で、朝鮮側が休戦後に上記借款の償還条件を検討してくれるよう希望している旨を伝えて来ました。ラズバイエフ同志はこれに関連してこの問題に関する公式提案を朝鮮政府に求めることは適當ではなく、上記借款の償還条件の調整は朝鮮休戦が完全に成立してからやるべきだと、考えております。ソ連の貿易省及び外務省は、大使の考えに同意しております。一九五二年七月一日から三年の償還条件で一九四九年に朝鮮に供与した総額二、二〇〇万ルーブルの借款に対して、ソ連閣僚は朝鮮政府に対して一九五二年七月一三日まで支払い期間の延長を決定・承認し、同借款の償還期間と条件に関しては朝鮮休戦の成立後に決めることに合意しました。

以上のことをご報告申し上げ、同志には別添のソ連閣僚会議の指示草案を検討して下さることを希望します。

貿易次官 エス ボリソフ

外務省 外相 A ヴイシンスキー

一九五一年二月

モスクワ クレムリン⁽⁵⁴⁾

「一九五一年九月八日付 ソ連閣僚会議決定 №三三五一を一部変更し、一九五一年一月一四日より朝鮮政府に供与した借款償還期間を朝鮮休戦締結後に取り決めることにしたソ連外務省及び貿易省の提案を採択する。

貿易省はこの問題に関して、朝鮮政府と文書で取り交わすこと。

ソビエト連邦閣僚会議議長 イ・ベ・スターリン⁽⁵⁵⁾

「二三六 一九五一年一月一四日付の協定より朝鮮政府に供与した借款の償還を延期し、休戦協定締結後に上記借款の償還期間と双方が合意に達する朝鮮政府の要請を充足させる事に関する朝鮮政府との文書を交わすこと。

ソ連共産党 幹部会 ビューロー⁽⁵⁶⁾

金日成の本心は、中ソ両国から物心両面の援助があるうちに南朝鮮を取って支配下に置きたかった。

所詮傀儡は傀儡、悲しいことには、頼っていたスターリン

朝鮮戦争の休戦会談

までもが死んでしまった。マレンコフでは金日成の希望を聞いてはくれない。まず、マレンコフには首班とは言え、緊急体制を乗り切るためのトロイカ体制下では北朝鮮などの衛星国家の運命などどうでもよかった。

それにもまして、ソ連の新体制は、金日成を評価しなかった。ソ連は早期妥結を望んでいたし、以前ほど強く朝鮮を支持していない。金日成にとっては悪い資料ばかり積み重なった上、北朝鮮に不利な状況ばかり出て来た。第一、ソ連は政治体制を確固たるものに整備して置かねばならなかった。だれが首班か、ソ連共産党最高幹部の六人はドングリの背くらべ、ヘゲモニー争奪戦に熾烈な戦いが混沌としていたので、朝鮮を顧みる余裕など全くなかった。第二にはトルーマン前政権に比べて、共和党政権は対中、対台湾政策が非常に積極的である。つまり、アメリカを背後にした蒋介石軍隊の大陸進攻が、いつ、行われるか分からない。第三には休戦協定を目指すアメリカは、以前よりもっと朝鮮半島問題に深入りしている。中共政府は対外には強がりを行い、如何にも大国のように装っている。所詮、生まれたばかりの社会主義国、人民を食わせるほどの国力がどこにあったろうか。この事情は、ソ連も同じであった。

他方、五三年二月二八日ダレスは、國務長官就任に際した記者会見を開き、「極東の目標は朝鮮半島とインドネシア半島への介入に対して、名譽ある終止符を打つ代わりに第七艦隊による中国大陆の海上を封鎖する」と、発表した。これには中共政府もほどほど困っていたようで、五三年四月二四日に周恩来は、アメリカに休戦会談の再開を呼びかけることになった。

アメリカにとっては機は熟し役者も揃った。

クラーク將軍の強気の政策に、ダレスの保守路線がぴったりと合った。まさに渡りに船で、休戦会談への足並みが揃うことになった。それに加え、中朝側の手の内も読んでいたことが分かる。交渉の段になれば、次のマニュアルを示すように相談が纏まっていたのである。

(一) 休戦までの戦闘では、米韓軍が常に主導権を握り不斷に中朝軍を圧倒する

(二) 決定的勝利に備え若干の必要措置を取る、つまり、休戦になろうとなるまいと戦場では常に敵を圧倒し、取れるだけの領土を取りまくれ、これがやがて講和の際に有利な条件を醸し出すであろうからだ。⁽⁵⁷⁾

こうしたなか、金日成は進退兩難に置かれた。

「中略。金日成は戦争やるならやる、止めるなら止める、どちらかはつきりして欲しいと言っています。戦線では毎日三〇〇人から四〇〇人の死傷者を出しているので、こちらでは伍修権元帥に軍事捕虜送還の件の対米交渉を任せ協議することが望ましいし、又、平和実現に関するソ連の提案は時宜に合っているとも言っております。

金日成は協議に備える気です。朝鮮政府は領内の米韓軍捕虜の人員確認作業及び板門店での会談資料などとそれに必要な声明文なども完備し、同志(マレコフ)の指示をチャートにして協議する事に合意しているのです。代表には、南日を留任する考えです。肩書は朝鮮民主主義人民共和国 外相代理とし、その旨を中国側にも通達するつもりです。

五三年三月二九日

クズネツォフ、ピョドレンコ⁽⁵⁸⁾

これは在朝ソ連人軍事顧問の代表格人物の発言である。

この段階になって、金日成はどうすることもできず、板挟みの状態を訴えているようなものである。ソ連大使やソ連人最高軍事顧問の地位が金日成を凌駕していた。

こうして、休戦への歩みは着々と進んだ。

第十二章 中朝の捕虜交換について

中朝の最終案

以下のステートメントは、モロトフ直筆のもので、休戦会談における捕虜問題の解決案の骨子に当たる部分、それまで捕虜交換に関する米韓側の提案に対して頑強に反対して来た中朝側が、態度を急変させた理由がここに記されている。

「傷病捕虜の交換はジュネーヴ規約第一〇九条に従うことにした。……その目的を十分に活かすため中朝政府は会談再開を即刻に提案し、……朝鮮停戦の合意を達成するために本官（モロトフ）は中朝両政府と連携し、全世界人民から厚い支持があることを希望するものである。

ソ連政府は朝鮮で公正な休戦を設定し、停戦の実現に努力してきた。

その一つが一九五〇年七月ネール・インド首相が送ったメッセージに対するスターリン同志の回答であり、……また安保理におけるソ連代表マリクのラジオ演説であったが、休戦交渉が昨年一〇月クラーク將軍のためにその締結が頓挫した。今度は中朝側が一九四九年のジュネーヴ協約一〇九条に基づ

く捕虜交換というクラーク將軍の提案を受諾すべきであると、小職は考える。

同条文を（捕虜交換に）適用させ、合意を見、調印交換の開始の予測が可能になったことに対してソ連は全く賛成である。中朝両軍司令官の彭徳懷及び金日成は、クラークの案を受け入れることを反対せずに休戦会談の再開を要請している。今年（五三年）三月三〇日周恩来外相声明がその証であり、特に、この点に留意する必要がある。……双方が休戦協議を再開し、送還要求の捕虜全員を軍事行動中止と同時に送還し、残りの捕虜に関しても送還問題を公明正大に解決することを目指して中立国に引き渡すことを約束するように提案した。ソ連は中朝両政府が提案した斯くも高尚な創意を歓迎する……。新たな世界戦争の防止のため、ポーランド決議案に含まれる朝鮮関連の部分について、以下の事項を次の修正に加えるべきだというポーランド代表の主張に国連総会に合意を求める件は、ソ連代表に委ねる。……この声明は、マレンコフ新体制によって初めて中ソ両国の二人三脚が始まったことを意味する。」

このときのソ連は、中国に対してスターリン時代のほどの威力を発揮することはできなかったようだ。休戦会談を直前にし

て中国の主張が大幅に通ったからだ。

「ソ連政府は板門店での休戦会談に際した文言作成の場合、金日成と彭徳懷とが参加するという中国側の意見に同意する。協定書面の交換の際の、全権代表については、中朝各々の裁量によって決定する旨をアメリカ側に伝え、その立場を堅持すべきである。しかし、アメリカ側は、中朝側の斯くなる状況に備え、まだ準備をしていないということを理由に、休戦調印を延ばして来る可能性があるが、この点を十分に気を付けるように……。」⁽⁵⁹⁾

なかなか手の込んだシナリオである

ソ連側の主張の『全権代表』の処理の件は、前代未聞でかつ国際法上慣例のない話だ。

しかし、次の電文では『金日成の参加は不可』と通告し、代表をだれにするかは中朝両国の所管事項。

要はアメリカに屈するな、と言っている。

「……現在の状況では李承晩一派が金日成の同志に対して挑発して来る可能性が十分にあるので、金日成の板門店行きは危険である。行かない方がいい。その代わり副首相を遣り、彭徳懷同志と連名で調印させるべきだ。金日成の板門店に来ないからと言って協定延期をするようなことをアメリカはし

ない。そうすれば、アメリカは国際社会から誇りを受けるだけだ。そんなことアメリカは百も承知だ。」⁽⁶⁰⁾

これまでと違った、ある意味では対米弱腰外交的な印象を拭い切れない。

何が何でも休戦だ、と言っている。

終わりに

一九五三年七月二七日午前一〇時、板門店では休戦会談が再開された。

多大の人命の損失に加え朝鮮史上未曾有な破壊を齎した戦争にしては、実に呆気なく終幕が下り、相互が三年間鎬を削り合った戦争は、uncertain victoryで終わった。引き分けを公言した訳でもなし、却って、何時でも有事の際には干戈を交えるという不安すら残した。それに不思議な話が、戦争を起こした者に対する責任を追求する声さえも聞かれず仕舞いである。休戦調印は国連側を代表したハリソン少将と、北朝鮮代表の南日とがテーブルをはさんで向かい合って、無慮一八種類の休戦に関する書類にサインし、戦局を終わらせるための複雑な作業も業務的に淡々と進み、双方の手打ち式は、瞬く間に終わった。朝

鮮全土に軍事行動中止の命令が下りたので、撃ち合いをしなくて済む、平和が来た、ほっと一息と、安堵感を覚えるが、正直な話、筆者を含む当時の韓国国民は嬉しくなかった。『北進』統一という至上命令が未完遂のまま戦争が小休止になっただけで、『憎き金日成』への懲罰もないまま自分だけが生きているのは、戦争で犠牲になった同胞の英霊に対して不遜だ、本当にこのままでいいのだろうか、と自責の念に駆られていた。

ところで、安堵感と虚脱感に包まれた戦争の犠牲は、いったいどのくらいのものであったろうか、つぎの資料は、こう教える。

① 人命の被害

a 韓国軍	b 人民軍
戦死者 一四一、〇一一名	二九四、九三一名
負傷者 七二七、〇八三名	不明
c 国連軍	d 中共軍
戦死者 三六、七七二名	一八四、一二八名
負傷者 不明	不明
e 民間人（韓国側のみ）	
死亡者 二二四、七六三名	
負傷者 二二九、六二五名	

朝鮮戦争の休戦会談

被虐殺者 一二八、九三六名

被拉致者 八四、五三二名

行方不明者 三六三、二一二名

戦争孤児 五九、〇〇〇名

北から南への避難民 六一八、〇〇〇名

② アメリカの戦争に投入した費用 約一五〇億ドル⁽⁶¹⁾

会談後 国連軍総司令官・クラーク將軍は、感慨深げにこう述べた。

「この瞬間は式典を祝うためのものではない。この休戦を通じて人類に幸福を齎すように困難な努力でも重ね、それによって、平和が実現するよう祈りを捧げる時とすべきだ。この機に臨み敢えて言いたい、この世界を救うには不断の警戒と努力が必要だという認識を、我々は常に持つべきだ⁽⁶²⁾ということを。」

正に至言というべきであろう。

戦争責任が金日成にある、こんな自明な論理が、これまでに南北の政治最高責任者の口から発せられたことはない。さらには南北の朝鮮人民の意思とは別に、飽くなき政権欲に目が眩み、ドンキホーテ的に南北統一を夢見た『無邪気な政治家』の『無

謀な政策失策』によって国民が悲惨で惨い戦争を強いられしたが、その反省の声は何が何でも統一に代わり、戦争によって破壊された人倫のことや朝鮮民族にとつて最大の不幸、相互不信などに対する反省に触れることは愚か、『統一至上』という風潮が真実に求める民衆の声をかき消してしまった。残念としか言いようがない。

民族のレヴェルでの朝鮮はともかく、現存する南北の政治家の程度はもつとも拙劣である。

理由は簡単。真実の意味で、彼らには民主政治をやる素質もなければ資格もない。戦後五〇余年を南北共々独裁政治、恣意政治に目がくらみ、北朝鮮では世襲制度のよるウリシク独裁国家を許しており、韓国では大統領独裁制を敷いて、大統領になればできないことはない。最近の韓国情報が伝えているように汚職を専らにしていたそのご令息までもが大君まがいふるまいを平然としている国柄を、我々は知るのである。そのくせ、『強盛大国』とか『太陽政策』とは、とんだ食わせ者であり、両者の実力の程も五十歩百歩、所詮戦争責任の所在を明かす勇氣すらない野合政権である。

この戦争は、いったい、朝鮮民族に何を教えたか。

まず、南北ともに戦争勃発の蓋然性があつた。金日成が先に

やらなくとも、李承晩がやった。それを立証する資料はいくらでもある。言わば、思想的にソ連製の金日成とアメリカ製の李承晩などが解放後の朝鮮民族の実情を理解できる立場に立つことも、それを理解する資格も、人民を支配する権利もなかった。長期間を祖国を離れ、米ソが俄に拵えた両者が民族の艱難辛苦を真に理解できる筈はなく、いわんや、民族の機微を知るはずもない。

次にこの戦争は民族間の不信を深める結果を齎し、南北朝鮮に独裁の温床を作り出した。休戦は南北の物心両面の交通を断つことを余儀なくし、結果、両政権は半世紀間を壁越しに相互の体制批判に明け暮れ、それを利にして南北の執政者は自己政権の安泰を図つて来た。北の金父子などは言わずもがで、長き互つて続いた韓国の軍事政権及び似非民主体制下の現政権もその好例であろう。

そして民主化の美名の下に自己執権時を第二の建国だとうそぶく韓国の現大統領も、真の民族和合とはなにか理解していない。和解も結構だが、罪を償うことなく有耶無耶に過ごせば、不義が罷り通つて正義が踏みなられ、善良な人民の努力の上に暴挙が蔓延するという体制—今の南北朝鮮のような—、なることを知るべきだ。所詮強盗や詐欺師などのような感性では歴史

を正視し国家や民族の進むべき道しるべを明かすべくオーソドックスな歴史判断ができまい。

最後に休戦協定の締結によって朝鮮は自らの手で統一作業を完遂できないことを実感した。多言を要すまでもなく、休戦会談を通じて何人も『統一は実現不可能な冷厳な事実』、ということを確認に知った。以上の諸点から民族再統一は夢のまた夢、休戦体制が半世紀間を継続するなか、わずか二二万平方キロの領土は永久分断し、民族観、国家観、社会観、そして人生観などにも随分乖離が生じ、民族の再和合の備え、どのように準備したらいいのか分からない状況を醸し出した。

こんな異常な分断状況の中で南北の指導者は、国民を蚊帳の外に放置し口癖のように民主化をよく語り、結果『民主分子』も多くを生んだ。挙句、ある程度ものが言える南の方では、辻褄の合わない民主主義論議が随分流行った。いかにも民主化が定着したかのように錯覚した韓国三流政治家諸君は、その実、傲慢で唯我独尊の執権層に対し、人民は生きる術としての『賢明な防衛本能』としての『民主化』を謳歌したに過ぎない事実を彼等、政治家は知らない。

南北朝鮮とも国民国家ではなく、民族国家である。

それ故に安っぽい英雄づくりに専念し、ナショナリズムは即

「独裁者奉戴」につながった。朝鮮戦争は朝鮮に即存した悪しき態勢を排除すべき絶好の機会であったのに南北朝鮮はそのことに気づかずにいる。国民国家づくりに着手すべきであろう。

終わり（二〇〇一年一月二七日）

《参考文献》

第一章 ソ連の根回し

- (1-1) 戦争論(上) クラウゼヴィッツ著・篠田英雄訳 岩波文庫
二三項

- (1-2) 休戦会談というよりも一時停戦の糸口を見出そうとソ連は画策した。スターリンの病気が悪化し、前後不覚になることしばしば、思考判断に支障を来すこともあった。ソ連は、ひとまず、休戦にしてスターリンの病気が回復するまで国際情勢を静観しつつ、スターリンを激務から小休止させようという配慮があったという。解放二〇年 ソウル希望出版社 五〇五頁参照

- (2) ニューヨーク発 No. 二八一一六 受信 一時三〇分。一九五〇年九月二七日 複写禁止、受付後は四八時間以内に外務省第一〇部まで返還されたし、の表題が付されている。

- (3) グロムイコからヴィシンスキーへ。受信地ニューヨーク、confidential のしるしあり。

- (4) No. 七九/一八九 A・グロムイコよりニューヨークのヴィシンスキーへ。(マレンコフ同志、モロトフ同志、グロムイコ同志、ボリシェビキ政治委員会 議事録 No. 79より抜粋)

朝鮮戦争の休戦会談

(5) 暗号電文No二五二二 フィリポープよりロシチンへ(周恩来に手渡せ)

(6) 暗号電文No三五三七九 北京発 特殊No二五二二 取扱者 プ
ロトニコフ

第二章 休戦会談の本格化

(7) ロシチンからソ連外務省へ。周恩来との会談を通じて今後の朝鮮での軍事行動に関する本国への報告であった。

(8) 毛沢東の朝鮮戦争 朱健栄 岩波書店 三五一頁

(9) 同書 三五一頁及び『朝鮮統一：在日朝鮮人社会・教育研究所編』五二頁、同研究所主催の学会に参加し同氏は、筆者の質問に直にこのようなニュアンスのことを言ったことがある。また、朝鮮戦争・下 学研 朱健栄寄稿文 六八頁。

(10) 暗号電文No六二三三、No六〇〇/暗 一九五一年一月三〇日

(11) 暗号電文No六五一、No六二〇/暗 一九五一年一月三〇日、フィ
ンシ(スターリンの暗号名)よりラズバイエフ同志

(12) 暗号電文五〇〇三二六/暗 No三三二/一九五一年一月三一日

(13) ソビエト連邦、武装力参謀本部。暗号電文No一〇一二五五
フイリポープよりラズバイエフ同志へ。No四/二七六一、一九五
一年五月二九日

(14) 韓国戦争における米空軍の戦略 R・フトレル 姜勝洪訳 ソ
ウル杏林出版 二九五頁の(4) 戦爆機の敵輸送機攻撃及び三〇
〇頁と、(5) の共産軍の兵站体系の強化の項参照

(15) 暗号電文No三〇二/暗 フィリポープよりロシチン同志へ(毛
沢東に手渡せ)

同志社法学 五四巻六号 二七〇(二二二四)

(16) 暗号電文No三〇三/暗 フィリポープよりクラソフスキ同志へ
(17) スターリン、ロシチンへの電文。高岡と金日成との会談結果に
伴うスターリンの書簡を、毛沢東に速やかに伝達するように電令し
たもの。五一年六月一三日

(18) 高岡と金日成のスターリンへのメモ。五一年六月一四日

(19) 暗号電文No三七七七 スターリンよ北京のクラソフスキ同志
へ。五一年六月二四日 No六三五一七七。四七九 ボリシェビキ
中央委員会特別課 第四掛 返還要 入No二二二/暗・秘 一
九五一年六月二五日

第三章 カークとの予備会談

(20) A・グロムイコ日誌より抜粋 SS級 五一年六月二七日。No
一〇三二ア・ゲ 駐ソ米大使「カークとの会見」の記

第四章 ソビエトから中国への指令

(21) 毛沢東よりフィリポープ同志へ。暗号電文 No二二二六六 四
八七/二二六四 五一年六月二八日

(22) 暗号電文No二二三三六 四九五二/二二〇四 五一年六月三〇
日 金日成よりフィリポープ同志へ

(23) 暗号電文No三九一七 フィリポープより北京のクラソフスキ同
志へ。(毛沢東同志へ手渡せ) 五一年六月三〇日 No三三三五一

(24) 朝鮮労働党歴史：朝鮮労働党出版社 一九九一年 平壤 三一
五頁

(25) ジョージ・ケナン回顧録 下 読売新聞社参照

(26) 五一年六月三〇日にニューヨークの国連本部からソ連外務省へ
送った電文。五一年六月二九日に国連文書と外交文書内容を伝達

第五章 休戦会談中の軍事行動

- (27) 北朝鮮軍が五〇年六月二五日に南朝鮮に攻めたときの北朝鮮総司令官で、將軍らしい將軍であつたらしいが、釜山橋頭堡の激戦で戦死した。かれの後任に浮上したのが民間出身の南日であつた。

- (28) 正しくは朴東招、これを中国読みでバクチョンジュと読んだのだろう。当時から北朝鮮の外務次官であつたらしい。

- (29) ラズバイエフよりシユテメンコへの電文 暗号電文No五〇一八六九/シユ。発信：五一年七月一日 受信：同日五：三〇

- (30) ソ連武装力参謀本部 第八局 暗号電文No一〇一五二九 No四 /三二〇八

- (31) 番号二二五 ソ連参謀本部 第二総局 暗号電文No二二二四九七/SS級

第六章 休戦本会談

- (32) 若き將軍の朝鮮戦争 白善燁著 草思社 三四七頁

- (33) だれのための戦争であつたか—韓国戦争の真実と意味—ソウル・タホルメディア 三二五頁

- (34) 前掲書 二二三頁

第七章 巨済島捕虜収容所

- M・リッジウェー『朝鮮戦争』恒文社及び丁一権『原爆か、休戦か』日本工業新聞社 参照

第八章 休戦会談の無期限延期

- (35) The Exchange of sick wounded prisoners of the war: April 18, 1953. U N Documents A/Res 705 (VIII) April 18 1953. に詳しい

朝鮮戦争の休戦会談

- (36) No八五八—三三七二 SS級 モスクワ クレムリン 外務省事案。名義人：ソ連閣僚会議議長 ゲ マレンコフ 同総務局長 エム・ボマズノフ

- (37) 暗号電文No八二七七、一九五三年三月二九日。ソ連外務省受信 特別No三六二、三六三。報告者 クズネツォフ、ピョドレンコ

- (38) Clark Mark W.: From the Donube to the Yaru (New York: Harper and Brothers 1954 参照)

第九章 休戦実現のスターリン指示

- (39) ソ連軍参謀本部 第二総局 暗号電文No二二〇五四 SS級 受信 一九五一年八月二二日 三時一五分 五四五/。No二四七六 五一年七月二二日 ゲ No三六五八 五一年七月二〇日

第十章 ついに休戦協定建議案まとまる

- (40) 暗号電文No八四/四二二 一九五一年一月一九日 金ソ連邦共産党中央委員会政治局会議 議事録No八四より抜粋

- (41) 暗号電文No八三/六二二 政治局議事録No八三(特別ファイル) 六一五頁『北京のクラソフスキ同志へ、毛沢東に手渡せ』五一年九月二六日

- (42) 解読電文No五〇三〇四八/暗 発五一、一〇、一七八：〇 一。受信五一、一〇、一七、一二：二二 ソ連軍参謀本部 第八局 無線で。大至急SS級 No三〇六九五

- (43) ソビエト連邦武装力参謀本部 第八局 暗号電文No一〇二五二二。No四/四三七七 五一年一月一三日

- (44) 解読電文 入 No五〇三五七七/暗

- (45) 発：五一年一月二七日 受：五一年一月二七日 一七：三

朝鮮戦争の休戦会談

五 ソ連軍参謀本部 第八局。受付はホットラインで、シリーズゲ SS級。シュテメンコ・エス・エム同志『フィリポー同志のための金日成同志からの暗号電文を報告します。ラズバイエフ』、となっている。No四四四八 五一年一月二七日

(46) 暗号電文No四一五六 発：五二年七月二四日

(47) 暗号電文No四一五七とNo五〇二・七四／暗 No二三一五 五二年七月二五日

第十一章 休戦会談直前の根回し

(48) 暗号電文No四〇一八 スターリンよりクラソフスキ同志へ。

(毛沢東のために) 進行状況を電文で知らせよ。No三〇三／暗

(49) 同所。イゲヌンは、李克農のことで、この当時は中国の外交部副部長をやっていた。

(50) 及び(4)は、暗号電文No二一六四六。毛沢東よりスターリン同志へ及びスターリンより金日成同志へ

(51) ソ連参謀本部 第二総局 SS級 暗号電文No二一六四六、No二〇八七 五二年七月一八日

(52) 暗号電文No五〇〇一五／暗

(53) 暗号電文No五〇〇一五／暗

(54) 幹部用ビュロ記事録No八 二三六五二 SS級 一九五三年二月一〇日

(55) ソ連閣僚会議提示 一九五三年二月

(56) ソ連共産党中央委員会 Noペ・ペ 八／二三六 一九五三年二月一八日 中央委員会幹部会 ビュロ 会議記事録No八から抜粋

同志社法学 五四巻六号 二七二(二三一六)

(57) クラウゼヴィッツ『戦争論』下 岩波文庫 篠田英雄訳参照

(58) クズネツォフ、ピョドレンコ。特別No三六二、三六三。五三年三月二九日

第十二章 中朝の捕虜交換について中朝の最終案

(59) 朝鮮問題に関する外務長官・モロトフの声明

(60) 同所

(61) 前掲書 From the Danube to the Yalu・マーク・W・クラーク

著参照

終わりに

(62) 解放二〇年史 ソウル 希望出版社参照